

神よ、我汝の御意を行はんとて来る。即ち御子は天の父が前叙の犠牲を悦び給はないことを理解して、其の御意を成就せんがために來られると言ふのである。其の御意は其れを完成せんがため、又神が備へ給ふた體を獻げられるに由つて遂げられる。書の卷に、福音書の註解にも掲げたやうに昔の聖書は、軸に羊皮紙を卷いたもので、それを其のまゝほぐして讀んだ。漢字の『卷』も竹紙を卷いた所から起つたのと同義である。要するにそれは詩篇の此の一部ではなしに、メツシヤの世に來られたのは神の御意を成就するため、神の目的を示す書卷に録されてゐると言ふにあらう（詩篇五六の九参照）。『詩篇に照合した點が聊か明瞭を缺くが、本書の著書は一般舊約全書を頭に置いて斯う言ふのに相違はない』（ビイク）。八、先には『汝いけにへと供物と燔祭と罪祭と（即ち律法に循ひて獻ぐる物）を欲せず、また悦ばず』と言ひ。即ち律法に循つて獻げたものが不完全であることを示す。九、後に『視よ、我汝の御意を行はんとて来る』と言ひ給へり。以上詩篇を引用した意義を明かにする。基督は舊約の犠牲が神の御意を満足せしめるのに不完全であることを宣言せられると言ふ。勿論此れは基督自身の宣言ではない。基督の精神が神に由つて聖書に授けられてゐる意味である。その後なる者を立てん爲に、その先なる者を除き給ふなり。即ち基督の行爲は律法の犠牲に反對するもので、之に遙に勝れてゐると言ふ。著者が此所で神を喜ばすことを言ふにのみ拘泥して基督の贖罪の能力

を知らない意味ではない。此所では犠牲の論理を掲げるのではないからである。十、この御意に適ひて耶穌基督の體の一たび獻げられしに由りて我らは潔められたり。『この御意』とは基督が世に來り給ふた御意を指す。それは舊約の犠牲が完成するこの出來なかつた神の御意は、人間を聖別する事業である。即ち神との眞の契合に人間を導くことである。此の御意は成就し、基督の體の犠牲に由つて神の交情に與かり得るやう潔められた。御意で『潔め』と言つてゐるのは儀典的の用語でユダヤの儀典では其の『潔め』は儀典的方法で行はれた。即ち身を洗つたり、血を灑いだりする儀式で、それによつて禮拜者は其の穢れから潔められ、神の御前に進むを得た。それが此所では眞の意義に於いて完成したことを言はうとするのである。我らに神との交通をも遮つてゐるものが除かれた。此れはユダヤの儀典に言ふやうな形式的の穢れではなく、良心の罪責が除かれたのである。神との交通を更新するのに必要なものは罪責の觀念を除かれるにある。罪人が其の罪責を免れ得る犠牲を獻けて其罪を身に負はれたことを實感するまじき、神との間の障壁が碎かれて神との交通が永劫に行はれるのに至つたことを感得するのである。十一、すべての祭司は日毎に立ちて事へ、いつまでも罪を除くこと能はぬ同じ犠牲を屢々獻ぐ。耶穌の事業は單に贖罪の日に犠牲を獻ける大祭司の職分に對照されるのみならず、普通の祭司が毎日獻ける犠牲にも對照される。彼らは永劫に除かれるべくもない罪の

犠牲を毎日献げてゐる。十二、然れど基督は罪のために一つの犠牲を献げて限りなく神の右に坐し。基督は其の犠牲を屢々献げられることは神の右に坐し給ふのことは矛盾する。故に基督の犠牲は絶えず行はれるのでもなく、繰返されるのでもない。斯くの如き犠牲は神に對する贖罪を完うし又満足させることは出来なかつた。『後の献物は何れも前の献物の價值なきを示し、前の献物は何れも後の献物の優越するこゝを示す、(十の二十八)』(ベンゲル)。十三、己が仇の己が足臺とせられん時を。其のこゝきは再臨の機會を指すもの、仇は罪を以て塊つたものを言ふ。十四、そは潔めらるる者を一つの供物にて限りなく全うし給ふなり。其の仇を粉碎する機會を待たれてゐるに過ぎない。蓋し其の犠牲には永劫の効力あり其の贖罪は永遠に完全であるからである。權威も効力も罪に勝利を得させないやうに神の右に坐し給ふ基督の御手の内に收められてゐる。十五、聖靈も亦我らに證して。それが聖書のうちに證言せられると言ふ。聖書の語なるが故に聖靈を稱するのである。十六、『この日の後、我彼らと立つる契約は是なりと主いひ給ふ。エレミヤからの引用である。即ち次の句を新しき契約として與へるこの預言である。十七、この後また彼らの罪と不法を思ひ出でざるべし』と言ひ給ふ。即ち新しき契約の預言に於いて神は御心に其の律法を刻銘せらるべきこゝを約束して後、彼らの罪を最早記憶せられないであらうこゝ仰せられた。即ちエレミヤが聖靈に由つて傳へた御語である。十八、斯る敵ある上は、

もはや罪のために献物を爲す要なし。十七節の御語がある以上は、即ち罪が赦された以上は最早や其の罪に對する贖のため犠牲の必要はないであらうと言ふ。

近づきて堅く立て

十九—二十五

十九然れば兄弟よ、我らはイエスの血により、二十その肉體たる幔を経て我らに開き給へる新しき活ける路より憚らずして至聖所に入るこゝを得、二かつ神の家を治むる大なる祭司を得たれば、二三心は濯がれて良心の咎をさり、身は清き水にて洗はれ、眞の心ま全き信仰とをもて神に近づくべし。二三また約束し給ひし者は忠實なれば、我ら言ひあらはす所の望を動かさずして堅く守り、二四互に相顧み愛と善き業とを勵まし、二五集會をやむる或人の習慣の如くせず、互に勧め合ひ、かの日のいよいよ近づくを見て、ますます斯の如くすべし。耶穌は我らの爲に天の聖所に入る新たな路を備へ給ふた。其の聖所にあつては耶穌が祭司である。故に近づいて其の過去の罪責を潔められ憚まない希望を以て堅く立ち、此の餘日の迫つた時代に於いて集會に勤勉にして奉仕に努力せねばならない。

十九、然れば兄弟よ、我らは耶穌の血により。著者は以上大體に互つて耶穌が舊約の儀典に優れ給ふ所以を説明して來たので、其の結論に入らうこゝして實際問題を論するのである。二十、その肉體たる

幔を経て我らに聞き給へる新しき活ける路より憚らずして至聖所に入ることを得。ユダヤ教の聖所へは禮拜者は入るを得なかつた。それは其の神聖を瀆す罪を懼れたからであつた。然るに我らのためには天の聖所の路が開かれ、信賴の念を以て少しの懼れもなく我らは至聖所に入るを得る。それは耶穌の血の恩恵によるのであるが決して血を携へて入るのではない。其の耶穌の血にさうしてそんな効力があるかは次の兩節で明かされる。二十一、且つ神の家を治むる大なる祭司を得たれば。普通の大祭司なる名稱を用ひず、故更「大なる祭司」と言つたのは「神の家を治むる」其の大權を力説せんがためである。即ち神の子として又其の臺前に現れ給ふ基督の偉大の點を指す。其の偉大なることは特に其の支配權に現れてゐる。神の家即ち地上の神の家を移した天上の現實の家を治められる。恰かも祭司が影たる地上の神の家を治むる權あること同意義に於いて天に於ける眞の神の家を治め給ふ權があること。二十二、心は濯がれて良心の咎をさり、身は清き水にて洗はれ、眞の心と全き信仰とをもて神に近づけし。我らの心が基督の血に濯がれて罪責の意識を洗ひ去られる（九の十四参照）と言ふ。斯くの如く犠牲の血は祭司の聖別に用ひられた（出エジプト記二十九の二十一、二十一、レビ記八の二十三、二十四、三十）、又「身は清き水にて洗はれ」は其の聖別の際に同様に行はれた儀式で（出エジプト記二十九の四）それが象徴となつてゐる内心の潔められることに當符めて言ふものと思はれる而して

て恐らくバプテスマを指すのであらう。斯くして純一無垢の心即ち神に對して疑念を聊かも包まない隠す所のない眞情を、確固として搖がない確信で幔の内に進み入らねばならない。二十三、また約束し給ひし者は忠實なれば、我ら言ひあらはす所の望を動かさずして堅く守り。元來約束を與へ給ふ神は忠信にして人間を欺き給ふ御方ではないから、其の約束は必ず遂げられることを堅く信じて希望に燃えつゝ、それを告白する通りに心掛けよ。此の告白は初めバプテスマの際に各人が行つた所である。二十四、互に相顧み愛と善き業とを勵まし。一本調子に自分だけでは聖別は出来ない、又自分の堅固のみでは完うせられない。故に注意深く他人に必要なものを察して絶えず愛を實踐上の善行で信仰の堅められるやうに慎重の態度を以て互に相勵ますを要すること。二十五、集會をやむる或人の習慣の如くせず、互に勧め合ひ、かの日のいよいよ近づいてきて、ますます斯くの如くすべし。著者は六の九、十で此の點を讀者に考へさせてゐるが、其の訓誨を完うするために讀者は公同の禮拜を相互の獎勵を等閑にしてはならない。『基督者のうちには迫害の怖しさからか、侮蔑してか、或は又業務の多忙のためからか斯くの如き集會を等閑にした』（ドッツ）。ツアアンは一方の集會を去つて同市の他の集會に移つて面倒を避けやうとするものがあつたので其の地位に止まつて他の弱い兄弟のために心を用ひることを命じたもの論じてゐる。兎も角も著者は基督者の生活には他を援助する必要あ

ることを誡めたものである。それは「彼の日」が近づいてゐる此の場合に、斯くの如き覺悟が一層必要であると言ふ。即ち主の再臨が近きにあると言ふのである。若し本書がエルサレムの滅亡二二年前に認められたものごすれば、著者はそれを「基督の臨御」ご解してユダヤ人が支離滅裂ごなるべき豫想に驅られながら斯く言ふものご思はれる。恐らくロマが戦を宣する豫兆がほの見えて、世間が何ごなく不安で、騒々しかつたものご思はれるのである。

知つて罪を犯す者の運命

二十六—三十一

- 二六 我等もし眞理を知る智識をうけたる後、ことさらに罪を犯して止めずば、罪のために犠牲、もはや無し。
  - 二七 ただ畏れつつ審判を待つことご、逆ぶ者を焚きつくす烈しき火ごのみ遣るなり。二八 モーセの律法を蔑する者は慈悲を受くることごなく、二三人の證人によりて死に至る。二九 まして神の子を踏みつけ、己が潔められし契約の血を潔からずごなし、恩恵の御靈を侮る者の受くべき罰の重きことご如何許とおもふか。三十 仇を復すは我に在り、われ之を報いん」と言ひ、また「主その民を棄かん」と言ひ給ひし者を我らは知るなり
  - 三一 活ける神の御手に陥るは畏るべきかな。
- 知つて犯す罪には審判が與へられる。律法に對する犯行さへも憐憫を被ることご出來ないごすれ

ば、神の子を蹂躪するものに對して神は如何なる酬いを與へられるであらうか。

此の背教に對する深刻にして嚴重な警告は第四章にあるものよりも更に切實である。此所で著者

が、故更の罪ご言つてゐるのは基督教に對する心からの背叛の意味である。

二十六、我ら若し眞理を知る智識を受けたる後。此所に原書は「蓋し」の句が加へられてゐる。故に審判の日も近づいてゐるから次のやうな不心得をしてはならないご言ふ訓誡である。故更に罪を犯して止めずば、罪の爲に犠牲、もはや無し。ユダヤの犠牲ご異り基督教では犠牲を二次びは獻けない。故に一次び信仰を得たものが、其の信仰を裏切つては再び犠牲を獻げることごは出來ないご。即ち此所で言ふ罪ごは基督が罪を贖ひ給ふ唯一の犠牲を否定することを言ふ。二十七、唯だ畏れつゝ審判を待つことご、逆ぶ者を焚きつくす烈しき火ごのみ遣るなり。畏れて待つと言ふので審判に對する恐怖の念が強められる。イザヤ二十六の十一「火汝の敵をやきつくすべし」の句から取られたもので、烈しき火は神の憤の形容である。二十八、モーセの律法を蔑する者は慈悲を受くることごなく、二三人の證人によりて死に至る。モーセの律法では背教に對する刑罰は申命記十七の六に準據して死に處せられる。二十九まして神の子を踏みつけ、己が潔められし契約の血を潔からずごなし、恩恵の御靈を侮る者の受くべき罰の重きことご如何許りとおもふか。律法の背教上に厳しき罰を被るべき罪責が三個條として陳べられる。即ち神

の子を踏みつけるもの、其の御手に最善のものを有し給ふ至高の存在に不法の侮蔑を與ふるのが其の一つ。契約の血は即ち基督の血で、此の血が人間を神との交情、奉仕に入るに適はしきものたらしめる潔めの要素で、之に由つて始めて契約の内に招かれる。然るに此の潔めの唯一の手段を自ら経験しながら此れを潔からずするもの。而して最後に恩惠の靈を侮蔑する者。神の現在と赦と確信を與へる此の恩惠の靈を冒し、各信者に至當の賜物を與へらるる源を否定することは靈的の境界にある凡てのものを否定することである。若しモーセの律法を守るために二十八節に言ふやうな刑罰が與へられるとすれば基督教に背く以上三個條の罪に對しての刑罰は如何ばかり嚴重な畏懼すべきものであらうか。三十、仇を復すは我に在り、我之を報いん。此れは申命記三十二の三十五からの引用であるが七十人譯の用語は少しく異り、私怨を酬いず、此れを神に任せよと勸める際にパウロがロマ十二の十九に用ひた語と符合してゐる。其の符合がさうして生じたか知り難いが、恐らく當時宗教上の諺となつてゐたものであらうとビイクは解する。主その民を審かん。申命記三十二の三十六及び詩篇百三十五の十四からの引用句である。前句が直接申命記からの引用でない所を見ると、此の句も詩篇から引いたものであらう。此れはイスラエルの敵に對する神の報復を指したものであるが、此所では兩句共に其の民の不信に對する神の御語を解して引いたものである。と言ひ給ひし者

を我らは知るなり。凡てのものを見そなはし給ひ、之に審判を與へ給ふ者は即ち「活ける神」である。審判者として神は最高の正義を布かれる絶對の權能を有し給ふ。三十一、活ける神の御手に陥るは畏るべきかな。二十七の「畏れつゝ、審判を待つ」と言ふのに相應する。支那人すら「天網恢恢疎にして漏さず」と言ふ。然し天網は疎ではない。人間の眼や審判には誤りや脱漏があつても神の活ける眼を瞑ますことを得ない。罪あるものゝ眼に見えないだけである。

### 過去の榮光に相應しきものたれ

三十二—三十九

三一 なんぢら御光を受けしものち苦難の大なる戦闘に耐へし前の日を思ひ出でよ。三三或は誹謗と患難とに遭ひて觀物にせられ、或は斯ることに遭ふ人の友となれり。三四 また囚人となれる者を思ひやり、永く存する尤も勝れる所有の己にあるを知りて、我が所有を奪はるるをも喜びて忍びたり。三五 されば大なる報を受くべき汝らの確信を投げすつな。三六 なんぢら神の御意を行ひて約束のものを受けん爲に必要なるは忍耐なり。三七 『いま暫くせば、來るべき者きたらん、遅からじ。三八 我に屬ける義人は、信仰によりて活くべしもし退かば、わが心これを喜ばじ』三九 然れど我らは退きて滅亡に至る者にあらず、靈魂を得るに至る信仰を保つ者なり。

然しながら信仰に留まるものは其の初の苦難を偲び、又他の人々に同情を籠めて其の同伴となつたことを思ひ起さねばならぬ。而して彼の信任を裏切らないやうに堅忍不拔の志を以て主は速かに來り給ふべく、義しき者が信仰に由つて活くべき預言を確信せねばならない。我らは信仰から退轉すべきものに非ず、救の確信を握つてゐるものではないか。

三十二、汝ら御光を受けし後、苦難の大なる戦闘に耐へし前の日を思ひ出てよ。彼らが困苦に奮闘に堪へて來たのは神との關係に其の經路の上を照した基督を信する新しい光明のためであつた。三十三、或は誹謗と患難とに遭ひて觀物にせられ、或は斯かることに遭ふ人の友となれり。其の苦難は二方面で一つは彼ら自らが遭遇したもの、一つは他の人々の苦難に同情し、自ら進んで之を負擔したものであつた。以上兩節に於いて第六章にあるやうに教會の過去の歴史と讀者に更に高い希望を懷き得る確信を以て警戒を與へるのである。此の兩項目中で著者は讀者の實踐上の善行と同胞愛を見て此の希望が正當である事を認めるに共に彼らが其の迫害に喜んで堪えた點を以て更にそれを認めるに言ふ。ピイクは此の條項から此れはネロ時代の迫害を指したものと推定してゐる。三十四、また囚人となれる者と思ひやり、永く存する尤も勝れる所有の己にあるを知りて、我が所有を奪はるをも喜びて忍びたり。三十三節を一層明白にする。即ち入獄した者に同情し、其の所有物を奪はれることを喜んだのが此の迫害であつた。當時には信仰のために囚へられたのであるが、或る時代には利己主義と利己主義との衝突から、權勢を握つてゐる者が意見の異つたものを獄中に放り込む場合がある。自己の屬する側の者を愛するが爲却つて投獄せられるのである。基督者は其の主義の如何に拘はらず、人間の罪から生ずる斯くの如く囚へられるものに同情を置かずにはゐられないであらう。三十五、されば大なる報を受くべき汝らの確信を投げすな。過去の苦難、之に對する堅忍、同胞を愛しての善行を記憶して彼らに天に於いて得べき所得の約束の誤のないことを確信せよと言ふ(二の二、十一の二十六)。三十六必要なるは忍耐なり。忍耐は必要なものはない。又今日の時代は忍耐の缺けてゐる時代はない。著者は其の時代に約束の所有を受くべき確信を以て世を送るのに最も必要なものは忍耐であること警告する。忍耐なきものは近眼である。故に物の正鵠な觀察を誤る忍耐あつて始めて深謀遠慮を以て自分の生涯を選ぶことが出来る。三十七、今暫くせば、來るべき者來らん、遅からじ。本節及び次節はハバクク二の三、四兩節からの引用である。即ち忍耐して、待つべき必要のある理由を示す。元來此の預言は偶像に事へるものが如何に跳梁拔扈して義しきものを苦しめてもそれは暫くの間の事で、必ず勝利あるべきを以て其の生命を保護し給ふ神に忠信に服して確信を搖がすなと言ふ意味である。著者はそれをメツシヤは直ちに再臨せられるから義しき者は信仰に由つて其の日を送るべき筈であ

害であつた。當時には信仰のために囚へられたのであるが、或る時代には利己主義と利己主義との衝突から、權勢を握つてゐる者が意見の異つたものを獄中に放り込む場合がある。自己の屬する側の者を愛するが爲却つて投獄せられるのである。基督者は其の主義の如何に拘はらず、人間の罪から生ずる斯くの如く囚へられるものに同情を置かずにはゐられないであらう。三十五、されば大なる報を受くべき汝らの確信を投げすな。過去の苦難、之に對する堅忍、同胞を愛しての善行を記憶して彼らに天に於いて得べき所得の約束の誤のないことを確信せよと言ふ(二の二、十一の二十六)。三十六必要なるは忍耐なり。忍耐は必要なものはない。又今日の時代は忍耐の缺けてゐる時代はない。著者は其の時代に約束の所有を受くべき確信を以て世を送るのに最も必要なものは忍耐であること警告する。忍耐なきものは近眼である。故に物の正鵠な觀察を誤る忍耐あつて始めて深謀遠慮を以て自分の生涯を選ぶことが出来る。三十七、今暫くせば、來るべき者來らん、遅からじ。本節及び次節はハバクク二の三、四兩節からの引用である。即ち忍耐して、待つべき必要のある理由を示す。元來此の預言は偶像に事へるものが如何に跳梁拔扈して義しきものを苦しめてもそれは暫くの間の事で、必ず勝利あるべきを以て其の生命を保護し給ふ神に忠信に服して確信を搖がすなと言ふ意味である。著者はそれをメツシヤは直ちに再臨せられるから義しき者は信仰に由つて其の日を送るべき筈であ

るが、退くものは神の恩寵を失ふ言ふ意味に解したものである。三十八、我に屬ける義人は、信仰によりて活くべし。若し退かば、我が心これを喜ばじ。斯かる間にも義しき者は信仰に於いて活き残り、主が直ちに其の能力を示されるときを待つであらう。「退かば」は原語は帆を絞る意味である。即ち忠信に進む生涯に反對する生活である。斯くの如き臆病に導かれるものは救ひやうのない滅亡に趣くものである。三十九、然れど我らは退きて滅亡に至る者にあらず。著者は基督を信する信仰を恩寵から離れないやうに讀者に警告したが、更に此所では、退轉しないやうに其の目的に對して召されたものであることを彼らに示す。靈魂を得るに至る信仰を保つ者なり。ルカ二十一の十九「汝らは忍耐によりて其の靈魂を得べし」こある。「今此の眞理は我らにも屬することを記憶したい。蓋し神が福音の光に由つて眷顧し給ふた我らは愈々益々進んで神に服従し、而して神に愈々近づくために絶えず努力するに至らんが爲に召されたものであることを認めねばならぬ。此れが靈魂の眞の保護である。蓋し斯くなるに至つてのみ我らは永遠の滅亡から遁れ得るからである」(カルヅキン)。即ち著者は讀者が卑怯未練の罪に陥るものと信するを得なかつた。彼らは其の靈魂を得る信仰を有するからである。其の信仰は如何なるものかは進んで次の章に述べるのである。

## 第拾壹章

### 信仰の定義

一それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を眞實とするなり。二古への人には之によりて證せられたり。三信仰によりて我等は、もろもろの世界の神の言にて造られ、見ゆる物の顯るる物より成らざるを悟る。四信仰に由りてアベルはカインよりも勝れる犠牲を神に獻げ、之によりて正しき證せられたり。神その供物につきて證し給へばなり。彼は死ぬれども、信仰によりて今なほ語る。五信仰に由りてエノクは死を見ぬやうに移されたり。神これを移し給ひたれば見出されざりき。その移さるる前に神に喜ばるることを證せられたり。六信仰なくしては神に悦ばるるこゝ能はず、そは神に來る者は、神の在すこゝに神の己を求むる者に報ひ給ふこゝを、必ず信すべければなり。七信仰に由りてノアは、未だ見ざる事につきて御告を蒙り、畏みてその家の者を救はん爲に方舟を造り、かつ之によりて世の罪を定め、また信仰に由る義の世嗣となれり。神の創造力に宿る我らの信仰の性質及びアベルの犠牲、エノクの移されたるこゝ、ノアの方舟の建造に見る實例を掲げる。

一、それ信仰は望むところを確信し、見ぬ物を眞實とするなり。既にハバククの句を引用して信仰に由

つて活かねばならないことを示したので、今度は其の信仰に由つて活きたものの例を示す。『此所に信仰の遺憾なき定義が與へられてゐると考へるのは大きな誤りであることも亦明かである。著者は此所は信仰が如何なるものか其の全體に亘つて物語つてゐるのではない。唯だ自分の言はうとする目的特に忍耐に關係する例に適合するものを選び出したに過ぎない。』(カルヅキン)。即ちカルヅキンの言ふやうに此れは『信仰』はどんなものかと言ふ定義ではない。信仰はどんなことを行ふかと言ふ定義である。即ち信仰は未だ其の掌中に握らず、未だ見ないものを、やがては必らず之を得出来るものとして其の希望を實相と認めるにある。望むところのものが實在であるとして之を確實に根據として生活するに在る。而して五管に觸れるものに普通に適用するやうに見えないものを眞實とするにある。二、古への人は之によりて證せられたり。『古への人』はイスラエルの長老たちの意味である。此所に著者は信仰の實例を挙げやうとするのである。即ち舊約時代に於ける篤信敬虔な人々で續いて陳べやうとする祖先を彼は『古への人』と稱する。其の信仰の篤かつたことは聖書に證明せられる所であると。彼は古への人の信仰が神に對する關係を結んで、基督の死が溯つて彼らに影響を與へる行動と認めたものであらう。三、信仰によりて我らは諸般の世界の神の言にて造られ、見ゆる物の顯はるる物より成らざるを知る。先づ著者は世の創造から筆を起す。即ち神が創造主であ

ることを主張するのは信仰から確證せられ、時代々々は目に見るものから出現したのではない。現象から出來たのではなく、神が創造せられたのである。『如何に信仰が各時代の歴史を通じて世の舞臺に超越する神との關係にあつて、人間の生活を支配する原則であるかを列記するに先立つて著者は此の舞臺そのものが信仰の作用に由つて神との關係に入るかを示すのである』(デギツドツン)。四、信仰に由りてアベルはカインよりも勝れる犠牲を神に献げ之によりて正しと證せられたり。創世記四の五に其の物語がある。然しアベルの犠牲が勝れてゐるとは其所には記されてゐない。然しアベルは一層其の選擇に注意し、價貴き供物を献けた意味に取られるが、此所では信仰と愛とから一層眞摯で遜つた精神から献けたと言ふ意味を思はれる。而して其の供物を神が嘉納し給ふたと言ふ。傳説ではアベルの犠牲は天よりの火で焼かれて、神が嘉納せられたことを示されたと言ふ。故に正しと證せられたと言ふのである。彼は死ぬれども信仰に由りて今尚ほ語る。創世記四の十にエホバがカインに對して『汝の弟の血の聲地より我に叫べり』と仰せられたとある。故に此所で言ふのは彼が不斷に叫んでゐるこの意味ではない。神に對する彼の血の聲が神に對して其の死の後、即時に叫んだ意味である。『エホバの聖徒の死はそのみまへに貴し』(詩篇百十六の十五參照)。即ちアベルの信仰の優れてゐるのは豊かな神に受けられる供物を献けたことと其の死の後にさへ尚ほ神に眷顧せられ



る地位が彼に與へられたと言ふにあらう。『それは彼に對する證據に外ならないのであつて、彼が死んだ後彼を神は眷顧し給ふた。故に神には貴い聖徒の一人であつたことを其の死に由つて見られる』(カルヱキ)。五、信仰に由りてエノクは死を見ぬやうに移されたり。神これを移し給ひたれば見出されざりき。『エノク神と偕に歩みしが神彼を取り給ひたれば居らすなりき』(創世記五の二十五)。とある。エノクの移されたこゝが彼の信仰に由るとは此所には明かに説かれてゐない。その移さるる前に神に喜ばるることを證しせられたり。ヘブルの文章で『神と偕に歩み』と言つたのを著者は神に喜ばれたものと解したのである。六、信仰なくしては神に悦ばるること能はず、そは神に来る者は神の在ますことと神の己を求むる者に報ひ給ふこととを必ず信すべければなり。神を悦ばせ奉るには先づ神に近づかねばならない。神に近づくことは神の存在を神を求むる者に應報し給ふことを信するを要する。エノクにせよ何人にせよ、神に近づくものは見えないものを事實に存在するものとして取扱ひ、其の酬に對する希望を實在のものとして認めるこゝである。此れは第一節に應ずる説明で、『見ぬ物を眞實とする』のは事實神が存在することを信するのであつて、『望むこゝろを確信する』のは神の己を求むる者に報ひ給ふことを必然に信する所以である。盲目的に奴隷の如き禮拜を行ふことを著者は信仰の正鵠なものとして認めないのであるとビイクは言ふ。七、信仰に由りてノアは未だ見ざる事につきて御告を蒙り、畏

みてその家の者を救はん爲に方舟を造り、且つ之によりて世の罪を定め、また信仰に由る義の世嗣となれり。未だ見ない未來を示され、其の未來の災禍からの救に特別に思を碎き、斯くの如き考を有しない不注意の生活を爲す世の人々に罪の宣告を與へ、正しきものに酬ひ給ふ神の公平を信する信仰の例としてノアを供提した。此れは創世記六の八―九の二十八の物語である。ノアは己に義しきものであつたからして、神の警告が與へられたのを『方舟を造つたからして義しきものとせられた』とヘブルの表現では言つてゐるのである。それは信仰に由つてである。此の句に由つて著者は不信仰の世が罪に定められて滅されるが、其の間にあつて信仰に堅く立つものはその滅亡から救はれることを得る意味を明かにするのである。

## アブラハムとサラの信仰

## 八一―八二

八信仰に由りてアブラハムは召されしとき嗣業として受くべき地に出で往けし命に遵ひ、その往く所を知らずして出で往けり。九信仰により異國に在るごとく約束の地に寓り、同じ約束を嗣ぐべきイサクミヤコトと共に幕屋に住めり。十これ神の誓み造りたまふ基礎ある都を望めばなり。十一信仰に由りてサラも約束したまふ者の忠實なるを思ひし故に、年邁きたれど胤をやどす力を受けたり。十二この故に死にたる者のごとき一人より天の星のごとき、また海邊の數へがたき砂のごとき夥多しく生れ出でたり。

アブラハムは未だ知らざる地に向つて故郷を後に出發し、カナンに於いても尙ほ其の希望の充たされないことを知つたのは其の信仰あるがためである。サラは人の信すべからざる頽齡になつても尙ほイサクの出生を疑はなかつたのは信仰あるが爲である。

八、信仰に由りてアブラハムは召されしとき嗣業として受くべき地に出て往けとの命に遵ひ、その往く所を知らずして出て往けり。アブラハムの信仰こそ、讀者の事情に最も好く似た適例である。彼が信仰の人として顯著な所以は未知の地に向つて故郷を棄てた點であるが、ヘブルの讀者はユダヤ教から召を蒙つて決然彼らの過去の主義を棄てた。彼らは自己のものでない地に彷徨い出て、神の都を望む約束の世嗣となつた。彼らは神に服従せんがために召された。アブラハムは即ち神の召に應じて之に服従して其の信仰を示した。彼は其の故郷や親戚が現在確實に見えてゐるのに異郷に異國の人々の間の不確實な彷徨の生涯を目差して出發したが、其の落ち着く場所さへ彼には定かでなかつた。唯だ彼は神の約束を與へられて、只管に神の忠信彼を欺かれないことを信頼するばかりに其の行動を採つたのであつた。

九、信仰により異國に在るごとく約束の地に寓り、同じ約束を嗣ぐべきイサクとヤコブと共に幕屋に住めり。其の約束の地に到着しても尙ほ彼は漂泊なだらの身の上であることを忘れず、其の子が出生し、孫が出生しても一時の居住に過ぎない天幕生活を送つた。著者はアブラハムが信仰に

由つて約束された地であるカナンさへも彼の爲に神が備へ給ふた永久の住居地とは認めなかつたと言ふにあらう。故に彼は天幕に住居して都を建設しなかつた。十、これ神の營まほしみ造り給ふ基礎ある都を望めばなり。即ちアブラハムは神が約束し給ふた都は神に相應するもので、搖がす永遠の基礎の上に設計せられ建造せられるものであることを信じて其のよきの到來するのを待つた。地上には斯くの如き都は望まらるべくもない。故に基礎工事のない天幕こそ斯くの如き假りの住居には適してゐる。彼は斯くして天のエルサレムを望み待つた。而して心に描く眞の家郷として天を望んだ。十一、信仰に由りてサラも約束し給ふ者の云々。サラは其の始め、石女であつた彼女が、頽齡に及んで子を産む理の由ないことを笑つた（創世記十八の十二、二十一の二）。ファアラは「サラ」もの「も」は「さへ」この意味に取るべきであらうと言ひ、フキイルドは此の句は前の句と一緒にアブラハムの信仰を指したものと云ふ。ビイクは「胤をやぎす力」の「力」は女に適用出来ないものであるから、アブラハムの行動に由つて其の力を宿したと解して、アブラハムの信仰の影響をすべきものであると言つた。十二、この故に死にたる者の如き一人より……夥多しく生れ出でたり。出生には全く能力のない死物に等しい、然かも僅かに一人の人から無數に繁昌する子孫が恵まれた。創世記二十二の十七、十五の五）。斯くの如く信仰は死から生命を産む。

## 父祖の信仰と其の都

十三—十六

十三 彼等はみな信仰を懐きて死にたり、未だ約束の物を受けざりしが、遙にこれを見て迎へ、地にては旅人また寓れる者なるを言ひあらはせり。十四 斯く言ふは、己が故郷を求むることを表すなり。十五 若しその出でし處を念はば、歸るべき機ありしなるべし。十六 されど彼らの慕ふ所は天にある更に勝りたる所なり。この故に神は彼らの神と稱へらるるを恥し給はず、そは彼等のために都を備へ給へばなり。

父祖たちは地上に於いては彼らの家郷を求め難いここに、神が彼らのために都を準備し給ふ天の御國の確信を以て未だ約束の物を受けなかつたけれども信仰を抱きつゝ死んだ。

十三、彼らは皆信仰を懐きて死にたり。即ちアブラハム、サラ、イサク、ヤコブ等は皆信仰を有しながら死んだ。而して約束が遂げられなかつたけれども尙ほ遙かの昔に信仰に由つてその後を望み見て之を祝するを得た。モーセが見えないものを見る如く耐へ得たのこ(二十七節) 同様に父祖たちは基督の日を見んことを願つて(ヨハネ八の三十六) 死に威嚇を受けなかつた。蓋し彼らは恰かも其の約束が完成したことを實見したと同様に之を確實に信じた。未だ約束の物を受けざりしが、遙に之を見て迎へ。甲板上にゐるものが波に見えつ隠れつする海岸にゐる友人を遙かに望んで見分けるやうに遙かの彼方から之を祝した。地にては旅人また寓れる者なるを言ひあらはせり。創世記二十三の四、

四十七の九。彼らは自己の家郷を求めたがそれを地上に發見しなかつた。故に異郷にある心地でカナンに地に居住した。十四、斯く言ふは、己が故郷を求むることを表はすなり。以上のやうに旅人、寓れる者自ら稱したのは其の落ち着くべき故郷がある意味なる。十五、若しその出でし處を念はば歸るべき機ありしなるべし。然しその故郷と言ふのが地上に於けるメソポタミヤならば彼らは其所へ歸るの何の手段もいらなかつた。幾度か其の機會は得られた。十六、されど彼らの慕ふ所は天にある更に勝りたる所なり。然し父祖たちの心では宛然漂泊してゐるやうで、何處にも求むべくもない更に良い國、確實な定住地を望んで燃えてゐた。それは天の外には存在し得ない個所である。彼らは斯くして其の約束せられたものよりも、約束せられた精神に信賴してゐることを示したので、神は彼らの神と稱せられることを耻辱と思召されなかつた。其の耻辱とせられない證據は神が彼らのために都を準備し給ふたので明かである。即ち父祖たちは、斯くの如き約束を與へて神が彼らの神となられたことを理解したが故に神は彼らの神と稱するを耻ぢられなかつた。此れは神が自ら「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」を仰せられたので證明せられる。而して都が彼らのために備へられてゐることに其の御力と善性とを基礎として、期待したので更に彼らの神たるを示された。

アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフの信仰

十七—二十二

十七 信仰に由りてアブラハムは試みられし時イサクを獻げたり、彼は約束を喜び受けし者なるに、その獨子を獻げたり。十八 彼に對しては『イサクより出づる者なんぢの裔と稱へらるべし』と云ひ給ひしなり。十九 かれ思へらく、神は死人の中より之を甦へらするこゝを得給ふと、乃ち死より之を受けしが如くなりき。二十 信仰に由りてイサクは來らんとする事につきヤコブを祝福せり。二一 信仰に由りてヤコブは死ぬる時ヨセフの子等をおの祝福し、その杖の頭によりて禮拜せり。二二 信仰に由りてヨセフは生命の終らんとする時、イスラエルの子らの出で立つこゝに就きて語り、又おのが骨のこゝを命じたり。

其の子イサクは神の約束の賜物なるに尙ほ之を神に獻けたアブラハムの信仰、其の子らを祝福したイサクの信仰、ヨセフの子らを祝福したヤコブの信仰、出エジプトの預言及び其の屍をカナンに葬るべきを命じたヨセフの信仰を進んで描く。

十七、信仰に由りてアブラハムは試みられしときイサクを獻げたり、彼は約束を喜び受けし者なるにその獨子を獻げたり。創世記二十二の一—十八。アブラハムの信仰に就いては既に繰返して陳べて來たが、此所に其の最大行動を示す。即ちアブラハムは神の約束が一身に掛つてゐる大切な子であるに拘はらず、其のイサクを犠牲として神に獻けやうとした。其の約束は彼が歡喜を以て迎へたものであつた

が、それさへ彼は意こしなかつた。それは神が一次び約束し給ふた事は假令中途で其の約束と矛盾するやうなこゝがあつても必ず成就せしめられるこゝを確く信じたからであつた。即ちイサクに由つて天の星の如く地の砂子の如く子孫が繁榮するこの約束を與へながら、其の子を犠牲にせよこの神の命は彼には矛盾に見えねばならなかつたが、彼は喜んで其の命に従つた。それは神が一次び約束したこゝを破られないのを確信したからである。イサクの外にイシマエルと言ふ子があつたが、彼の正系はイサクであつたから『獨子』と言ふ。十八、『イサクより出づる者汝の裔と稱へらるべし』と云ひ給ひしなり。即ち下婢の子なるイシマエルは此れを除外して、イサクの後裔のみが彼の正系と認められ彼から子孫が繁榮するこの約束である（創世記二十一の十二）。然かもそのイサクをアブラハムは神に獻げたと言ふのである。十九、彼思へらく神は死人の中より之を甦へらすることを得給ふと。神は死人をさへ甦らせ給ふ能力を有せられるを信じてである。其の信仰あるが故に獨子を獻けた。乃ち死より之を受けしが如くなりき。日本譯は明快となつてゐるが原語は『如くなりき』を『譬として』と解される意味があるために色々な議論を生じ、果ては耶穌の復活の譬であつたと言ふ意味だこゝへ論ずる向がある。然し日本譯のやうに解すべきものも一般に認められてゐる。實際に死から甦へつたのではないが殆んど死に近い危険を通過して來たので、彼を取りもぎしたこゝはアブラハムには復

活き同様な思ひがあつたと言ふにあらう。二十、信仰に由りてイサクは來らんとする事につきヤコブとエサウとを祝福せり。創世記二十七章一終。其の始めイサクは知らずにヤコブを祝福したが、後にそれが神の攝理であつたことを知つて更に彼を祝福した。而してエサウの祝福には遠き後のイスラエルの解放が預言せられてゐることを認められる。兎も角エサウも亦其の靈的に低い品性に似つかはしい祝福を受けた。二十一、信仰に由りてヤコブは死ぬる時ヨセフの子等を各祝福し、その杖の頭によりて禮拜せり。創世記四十八の一終。信仰に由つてヤコブはヨセフの子ら（即ち孫ら）の運命を示され自分の子らに同様に其の祝福を彼らに與へた。而して信仰に由つて右の手をエフライムの頭に加へマナセに左の手を與へて祝福したが、右の手を與へられた弟のエフライムもマナセも後の歴史が其の誤りのなかつたことを證明してゐる。「杖の頭」は譯の相違がある。ヘブルの原語「床」は「ミツタ」、「杖」は「マツテ」で日本改譯はギリシャ譯に従つたものである。日本舊約には「床の頭」（創世記四十七の三十一）もある。二十二、信仰に由りてヨセフは生命の終らんとする時イスラエルの子らを出て立つことに就きて語り、又己が骨のことを命じたり。創世記五十の二十四、二十五。彼の信仰は其の子孫が必ずエジプトから救ひ出さるべきを信じ、特に其の遺骨はカナンに運ばるべきを命じた點に彼の信仰が伺はれる。其の命令は全うせられたことがヨシユア二十四の三十二に記されてゐる。

モーセと其の父母の信仰

二十三—二十八

二三 信仰に由りて両親はモーセの生れたる時、その美しき子なるを見て王の命をも畏れずして三月の間これを匿したり。二四 信仰に由りてモーセは人となりしときパロの女の子と稱へらるるを否み、二五 罪のはかなき歡樂を受けんよりは、寧ろ神の民ととも苦まんことを善しとし、二六 キリストに因る誘はエジプトの財寶にまさる大なる富と思へり、これ報を望めばなり。二七 信仰に由りて彼は王の憤恚を畏れずしてエジプトを去れり。これ見えざる者を見るがごとく耐ふる事をすればなり。二八 信仰に因りて彼は過越の血を灑ぐことを行へり、これ初子を滅す者の彼らに觸れざらん爲なり。

モーセの父母の信仰は其の子を隠匿して國王の命に背いた點に認められ、モーセの信仰はパロの宮邸に止まることを避け、壓制せられた神の民と其の運命を共にしたことを又エジプトを出で、過越の祭を制定したことに認められる。

二十三、信仰に由りて両親はモーセの生れたる時、その美しき子なるを見て王の命をも畏れず云々。出エジプト記二の一、二。モーセの両親の信仰は二方面から窺はれる。即ち其の子の美はしいのを見て其の子に對する神の思召を觀破したことを、死刑の宣告を受くべき法律に畏れない勇氣を有したことをである。二十四、信仰に由りてモーセは人と成りしときパロの女の子と稱へらるるを否み。パロの女の子

こしてゐるこゝも自由に出来たのを自ら棄てた意味である。此れは出エジプト記には見えない記事であるが、著者の當時にユダヤで信ぜられた所に従つて斯く言つたものと思はれる。二十五、罪のほかなき歡樂を受けんよりは云々。此れはモーセが酒池肉林の歡樂を壇まゝにする言ふ意味ではない。其の行爲それ自身は罪なきものでも彼に取つては罪なるべき、其の天才に應じて榮華を自由に極められる地位を指したものである。彼は其の行路よりも更に他の責任を盡す義務のあるこゝを覺悟した。即ち信仰に由つて彼は斯くの如き歡喜は一時的のもので永久の満足ではないこゝを認めたと云ふ。二十六、基督に因る謗は云々。著者はモーセが自ら好んでメツシヤに加へられるべき誹謗を身に荷ふ覺悟をした言ふ。メツシヤに對する誹謗は當然それに隨從するものを受けねばならない誹謗である。これ報を望めばなり。著者はモーセの行動は望む所のもの、目に見えない天の報を期待して斯くの如き決心をしたもの認めたとのである。二十七、信仰に由りて彼は王の憤恚を畏れずしてエジプトを去れり。此の句に就いて色々の説がある。即ちモーセがエジプトを去つてミデアンに行つたこゝを言ふこゝ解する人と、エジプトを遁れ出たこゝを指すこゝ解する人々がある。ミデアンに遁れたのは王の怒を懼れたからであると歴史に記されるから出エジプトの意味だこゝ一方は論ずる。然しドツヅは「ヴァウガンのみ著者の意味を明かに捉へ得た唯一の註解者である」言ひ、其の説を紹介して

「兩方の懼れは各異つてゐる。一方の懼れはエジプト人を殺したことを發見せられるのを懼れたもので、他の畏れは其の遁れたこゝをバロが怒るこゝを畏れる意味である。彼は懼れたから遁れた。彼は畏れなかつたから遁けた」言つてゐる。即ちバロの怒を畏れなかつたから遁げたこゝ著者が言ふものこゝ解してゐるのである。これ見えざる者を見るが如く耐ふる事をすればなり。彼は遁げて其の民を救ふべき計畫を一時見合せた。然し見えないものを望んで四十年ミデアンで待つたこゝは彼の信仰の搖がない證據である。彼は長く忍耐して其の時機の到來するのを待つた。二十八、信仰に由りて彼は過越と血を灑ぐことを行へり。信仰に由つてモーセは再び死から救はれた。即ち過越の祭と血を灑いで殺戮の天使の手からイスラエルの初子を救つた。斯くの如き災禍が來るべきを信じたのは信仰でそれを救ふ手段を示される通りに信じたのも信仰である。

## 紅海とエリコ

二十九—三十一

二九信仰に由りてイスラエル人は紅海を乾ける地のごとく渡りしが、エジプト人は然せんこゝ試みて溺れ死にたり。三十信仰に由りて七日のあひだ廻りたればエリコの石垣は崩れたり。三一信仰に由りて遊女ラハアは平和をもて間者を接けたれば、不従順の者こゝもに亡びざりき。

紅海の渡渉、エリコの陥落及びラハアの安全に示される信仰。

二十九、信仰に由りてイスラエル人は紅海を乾ける地の如く渡り云々。出エジプト記十四の十五—二十八。信仰の偉大な奇蹟を行ふ能力を陳べるのである。紅海に對して其の道を求めても信仰あるイスラエル人には恰かも乾ける地を行くやうに海水が開いた。然し信仰なきエジプト人がそれを試みたとき海は閉されて彼らは溺死した。三十、信仰に由りて七日の間廻りたればエリコの石垣は崩れたり。ヨシユア記六の一—二十。別に目に見える軍隊の力を用ひずして石垣が崩れることを信じたのは其の信仰の偉大なことを示す。民衆は唯だ神の約束を信じ、何らの効果も見えないのに七日の間同じ行動を繰返した。自然のまゝにして堅固な石垣が唯だ廻つただけで崩れると考へるのは實に馬鹿氣た行動に過ぎなかつたであらうが、彼らは只管に神の約束を信じて命ぜられる通りに實行したのである。三十一、信仰に由りて遊女ラハブは平和をもて問者を接けたれば、不従順の者とともに止むべき。ヨシユア記六の十七、二十二—二十五。ラハブはヘブルの間者を隠匿まつて、之を助けた。彼女はエホバが天地を統べ給ふ神なるを信じ、又神がイスラエル人にカナンを與へ給ふことを信じた。然るにエリコの民は歴史上イスラエルを援助し給ふ神あるを知りつゝ、其の神の民に反抗したのは「不従順」の證據である。

其の後に起つた信仰の偉人たち

三十二—四十

三二 この外なにを言ふべきか、ギデオン、バラク、サムソン、エフタ、またダビデ、サムエル及び預言者たちに就きて語らば、時足らざるべし。三三 彼らは信仰によりて國々を服へ、義をおこなひ約束のものを得、獅子の口をふさぎ、三四 火の勢力を消し、劍の刃のがれ、弱よりして強くせられ、戦争に勇ましくなり、異國人の軍勢を退かせたり。三五 女は死にたる者の復活を得、ある人は更に勝りたる復活を得んために免さるること願はずして極刑を甘んじたり。三六 その他の者は嘲笑と鞭と、また縲紲と牢獄との試練を受け、三七 或者は石にて撃たれ、試みられ鐵鋸にて挽かれ、劍にて殺され、羊、山羊の皮を纏ひて經あるき、乏しくなり横まされ、苦しめられ、三八 (世は彼らを置くに堪へず) 荒野と山と洞と地の穴とに徨へり。三九 彼等はみな信仰に由りて證せられたれど約束のものを得ざりき。四十 これ神は我らの爲に勝りたるものを備へ給ひし故に、彼らも我らと偕ならざれば全うせらるる事なきなり。

ヨシユア以後信仰に由つて行はれた鴻業の略叙である。信仰に由つて多くの人は偉大な勳功を表し、英雄的堅忍不拔の精神を示した。

三十二、此の外なにを言ふべきか、ギデオン、バラク、サムソン、エフタ、またダビデ、サムエル及び預言者たちに就きて語らば時足らざるべし。此所に至つて著者は陳べ來つた手法に由つて、各委細に亘つて彼

の歴史に現はれた人物の記録を一々擧げる違はないと認めた。故に二つの方面から其の信仰の偉人を列記する。一つは信仰に由つて英雄的事業を行つた人々、一つは信仰に由つて激しい迫害に毅然として懼れず立ち向つた人々である。先づ四人の士師を擧げた。即ちギデオン（士師記六章一八章）バラク（同四章五章）サムソン（同十三章一十六章）、エフタ（同十一章十二章）である。次にイスラエルの歴史上に秀ぐれて其の頭角を現してゐる勇壯な國王ダビデを擧げ、次に預言者に移つて士師にして預言者を兼ねたサムエルを擧げてゐる。斯くの如き人々は信仰に由つて偉大な勝利を遂げた實例中の錚々たるものであつた。三十三、彼らは信仰によりて國々を服へ、義を行ひ、約束のものを得、獅子の口をふさぎ。「國々を服へ」は同じく「義を行」つた士師及びダビデの治世を指したものであると思はれる。もつこもそれは個人的に義を行つたもので（詩篇十五の二）あるが、ダビデに就いてはサムエル後八の十五、歴代史略上十八の十四、エレミヤ二十三の五に「正義を行ひ」こある。又サムエルが義を行つたこはサムエル前書十二の三に記録せられる。ビイクは著者がマカビイ家をも其の心に描いてゐたものと思像してゐる。「約束のものを得」は多くの例に見るが、それは救ひの約束の意味ではなく特殊の場合に與へられた約束を得た意味でヨシユア二十一の四十五、士師七の七、十二の五、列王記上八の五十六に記される所を指すのであらう。「獅子の口をふさぎ」は言

ふまでもなくダニエルに就いて言ふもので（同書六章）であらう。三十四、火の勢を消し、劍の刃を遁れ、弱よりして強くせられ、戰爭に勇ましくなり、異國人の軍勢を退かせたり。「火の勢力を消し」はダニエル三章にあるシャデラク、メシヤク、アベデネゴの例を見るべく、其の次からの諸項目はイスラエルの歴史に夥しい實例を見る。フォン・ソウデンはマカビイの獨立戰爭を言ふと認め、ビイクも之を採用し、ドツヅも之を引照する。ファラアは特に此に注意し、其の他何れも斯く認めてゐる。

三十五、女は死にたる者の復活を得、ある人は更に勝りたる復活を得んために免さることを願はずして極刑を甘んじたり。ザレバテの寡婦（列王記上十七の八一二十四）、シユナミ人の女（列王紀下四の十八一三十七）を指し、「ある人」以下はマカビイの物語に見える九十歳のエリアザルが其の死を免さんこの誘を貶けて殉教した事實又七人の兄弟が死を免すこの提言を貶けて毒を飲んだこを指したもこの思はれる。其の殺されるこき兄弟の二番目のものは「此の世の王は我らを甦へらさん」こ言ひ三番目は其の手を斬られるこきは、神は再び兩手を與へ給はんと叫び、四番目のものは死に行く間に「人の手に殺さるるとき、神が甦らしめ給ふを望むは幸福なり」こ言ひ、一番下の弟は兄弟たちのこを「彼らは永遠の生命に就いての神の契約の下に死す」こ宣言した（ドツヅより）。三十六、その他の者は嘲笑と、鞭とまた繯と牢獄との試練を受け。前節に掲げた殉教者の身の上を別の方面から言



ひ表はす。『縲紲に牢獄』も夥しい例があるが、此所ではエレミヤ（三十八の九）の事を言ふのであらう。三十七、或者は石にて撃たれ、試みられ、鐵鋸にて挽かれ、劍にて殺され、羊、山羊の皮を纏ひて經あるき、乏しくなり惱まされ、苦しめられ。『石にて撃たれ』はエホヤダの子ゼカリヤ（歴代志略下二十四の二十一）の例がある。傳説に由るエジプトのダフネでエレミヤは石で撃たれたと言はれてゐる。拷問は俘虜に加へられたものでサムエル後書十二の三十一、アモス一の三参照。典外聖書に由るミイザヤはマナセのために木の鋸で曳かれたと言ふ。アハブの下の預言者、エホヤキムの下の預言者（列王紀上十九の十四、エレミヤ二十六の二十一—二十三）は劍で殺された。漂浪、彷徨の生活、即ち家なく、隱家なく、亡命の生活であつて夥しい例がある。羊、山羊の皮は列王紀上十九の十三、十九、同下一の八、二の八、十三、十四、ゼカリヤ十三の四。『乏しくなり』以下はマカビイ時代に敬虔なユダヤ人は荒野に遁れて、洞穴や、地の穴に隠れて僅かに生命を完ふした。三十八、世は彼らを置くに堪へず。『世は彼らを放逐した。即ち彼らは世に住む價值なきものと認められたからである。然るに事實は世は彼らが住む價值なきものであつたのである』（デビッドソン）。荒野と山と洞と地の穴。前節に言つたマカビイ時代の事件であらう。三十九、彼らは皆信仰に由りて證せられたれども約束のものを得ざりき。既に（二一—二十八）陳べたやうに父祖を始め代々の敬虔な人々は信仰に由つて約束の成

就を豫想して、死んだので、未だ確實にそれを握つた譯ではなかつた。其の約束の遂げられないのは神の方の怠慢でもなければ人間の方で其の信仰が不充分だからでもない。其の理由は、四十、これは神は我らの爲に勝りたるものを備へ給ひし故に、彼らも我らと偕ならざれば全うせらるる事なきなり。即ち彼らの時代には其の救の完成が與へられなかつた。而してそれは我らの時代に於いて始めて備へられたのであるが、それは單に我らの時代の爲のみではない。彼らも我らも共に基督の贖に由つて同時に完全させられる爲であると。『マカビイ』に就いては附録『ユダヤの歴史』三四、三五頁参照

## 第拾貳章

### 苦惱、其の歡喜と其の訓練

#### 一一三

一この故に我らは斯く多くの證人に雲のごとく圍まれたれば、凡ての重荷と纏へる罪を除去、忍耐をもて我らの前に置かれたる馳場をはしり、二信仰の導師また之を全うする者なるイエスを仰ぎ見るべし。彼はその前に置かれたる歡喜のために、恥をも厭はずして十字架をしのび、遂に神の御座の右に坐し給へり。三なんぢら倦み疲れて心を喪ふこと莫らんために罪人らの斯く己に逆ひしことを忍び給へる者をおもへ。四汝らは罪を闘ひて未だ血を流すまで抵抗しことなし。五また子に告ぐるごとき汝らに告げ給ひし勸言を忘れたり

曰く、『わが子よ、主の懲戒を輕んずるなかれ、主に戒めらるるまじき、倦むなかれ。六そは主、その愛する者を懲しめ、凡てその受け給ふ子を鞭ち給へばなり』と。七汝らの忍ぶは懲戒の爲なり、神は汝らを子のごまぐ待ひたまふ、誰か父の懲しめぬ子あらんや。八凡ての人の受くる懲戒、もし汝らに無くば、それは私生兒にして實の子にあらず、九また我らの肉體の父は、我らを懲しめし者なるに尙これを敬へり、況して靈魂の父に服ひて生くることを爲ざらんや。十そは肉體の父は暫くの間その心のままに懲しむることを爲しが、靈魂の父は我らを益するため、その聖潔に與らせんとして懲しめ給へばなり。十一凡ての懲戒、今は喜ばしき見えず反つて悲しき見ゆ、されど後これに由りて練習する者に、義の平安なる果を結ばしむ。十二されば衰へたる手、弱りたる膝を強くし、十三足蹇たる者の履み外すまじきなく、反つて醫されんために汝らの足に直なる途を備へよ。

以上列記して來たやうに我らは雲霞の如き信仰の選手に圍まれてゐる。故に信仰の最高の實例たり、不撓不屈の堅忍を有せられる耶穌を仰いで努力せねばならない。讀者は其の苦惱に喜んで堪へないのは彼らが靈性の父なる神が其の子を訓練せられることを忘れてゐるからである。父は其の子のために到れり、盡せりの心を用ひ給ふ。故に意氣沮喪したるものを鼓舞し、其の行程に横はるものを排して進まねばならない。

前章に掲げた幾多の信仰の赫々たる實例から著者は讀者も亦之に倣つて信仰の英雄ならねばならないことを勧めるのである。

一、この故に我らは斯く多くの證人に雲の如く圍まれたれば。以上陳べて來たやうに我らは信仰に由つて其の功績を示した證人にと言ふ。此の『證人』は原語では殉教者の意味があるが、此所では信仰の威力を證明した人物と言ふにあらう。其の救ひが我らの努力に如何に拘はつてゐるので彼らは熱心に觀覽してゐるま取る人々もあるが、そんな意味は含まれてゐない。彼らは曾て自ら經驗した所に従つて我らの興廢如何を氣遣ひながら見守つてゐるま言ふにあらう。『雲の如く』は夥しい意味、日本で言ふ『雲霞の如く』と同様な意味。凡ての重荷と纏へる罪とを除け、忍耐をもて我らの前に置かれたる馳場をはしり。『重荷』は『過剰な肉』の意味で、デブ／＼肥つた肉を運動し練習で減退せしめる意味で、競争から出た用語である。基督者は其の競争に適するやうに道徳的訓練で嚴かに己を取締らねばならない（コリント前書九の二十四—二十七参照）。『纏へる罪』即ち競走に不便な着物を脱ぎ棄て、である。誰も羽織、袴で競争するものはない。邪魔な衣類は悉く脱いで、シャツ一枚になるやうに、餘計なものを悉く棄て、走れま言ふ。二、信仰の導師また之を全うする者なる耶穌を仰ぎ見るべし。一方に古への聖徒が我らを見守ることを忘れないと同時に、散布した星の前の太陽のやうに

耀く信仰の指導者にして、信仰を完全に示される耶穌に其の眼を離さず走れと言ふ。耶穌に於いての我らは神に完全な信任を以て絶対に依頼せられ、其の信仰の代價、其の結果を見ることを得る。彼は其の前に置かれた歡喜のために、恥をも厭はずして十字架を忍び、遂に神の御座の右に坐し給へり。其の信仰は耶穌に現はれたもので、殊に耶穌が其の信仰を以て十字架の結果を歡喜しつゝ、之を耐忍ばれた點に見える。其の歡喜は利己的のものでなく、人間の救のために獲得せらるべき權威を意識して抱かれたものであつた。而して此の權威を獲得せらるべき希望から人間の苦悶と耻辱を極度に受けて之を忍ばるるを得た。而して其の行動にはそれに伴つて來るべき榮光が示された。三、汝ら倦み疲れて心を喪ふこと莫らん爲に罪人らの斯く己に逆ひしことを忍び給へる者をおもへ。耶穌に眼を着ける必要のある理由を陳べるのである。ヘブルの信者は世間から反對せられて、惡意を以て取扱はれる此の信仰を寂しく持ち續けて行くことを唯だ苦しいと考へた。故に著者は、それよりも一層甚だしい反對を受け給ふた耶穌を思へと言ふ。四、汝らは罪と闘ひて未だ血を流すまで抵抗しことなし。此の句には色々議論がある。此れはまだロマの迫害の起らない前の事であつて、殉教したものがないとの意味に解する人々も少くない。然しそれは他の點で解釋が困難なる。矢張りヴァイスやデビッドソンの言ふやうに「此所で罪と言ふのは罪人のことではない、不信の罪を言ふのである。即ち彼ら自身のうち

にある罪、彼らを妨げる眞の反對者は自分のうちにある不信の罪で、勿論迫害者の爲に此の罪が一層威力を加へるに相違はないが、それを直接言ふのではない（ヴァイス及びデビッドソン）。五、また子に告ぐるごとく汝らに告げ給ひし勸言を忘れたり。箴言三の十一、十二からの引用を試みやうとして斯く言ふ。曰く『我が子よ、主の懲戒を輕んずるなかれ、主に戒めらるるとき、倦むなかれ。六、そは主、その愛する者を懲らしめ、凡てその受け給ふ子を鞭ち給へばなり』と。苦痛は神の愛の表象で彼らが子たる證據に外ならない。彼らは聖書の訓誨を忘れてゐるから苦痛に逡巡するのである。彼らが折檻せられ、神が其の訓練を行ふことを廢せられないのは其の子だからである。要するに彼らに苦難の與へられることは神が彼らを憎まれるからではない。世の子らが其の父から折檻を受けるのと同様に神の愛の鞭である。七、汝らの忍ぶは懲戒の爲なり……誰か父の懲しめぬ子あらんや。著者は彼らの苦痛は其の訓練のためであつて、斯くの如き苦痛を神の行爲や神に對する關係に不都合があるものと認めてはならないと言ふ。如何なる父も其の子に訓練を與へる。故に神が若し彼らの父ならば其の子に同様な手段を施さるべきである。八、凡ての人の受くる懲戒、若し汝らになくば、それは私生兒にして眞の子にあらず。若し神が彼らを折檻せられなければそれは彼らに眞の子として取扱はれないからである。而して其の實子に對して責任を負はれないからである。神は『凡てその受け給ふ子を鞭ち給ふ』（六

節)のは其の子を折檻せられねばならないからである。天の父は舐犢の愛に祖母が盲目的に其の孫を甘やかすやうな $\parallel$ を有せられる御方ではない。其の子を最高の善人に造り上げやうとせられる。若し其の子を折檻しないやうな親があれば其の子が合法の子でないからである。九、肉體の父……靈魂の父。我らは肉體の父の折檻にさへ喜んで服従する。況んや神は靈魂の父で其の折檻にも我らを靈的に最高の方法を以てせられ、それを正しく受ければ永遠の生命が授けられるのであるから更に畏んで之を受けねばならない。靈魂の父は即ち普遍の人類の父と言ふ意味である。十、その肉體の父は暫くの間、その心のまゝに憑しむることを爲しが。肉體の父は、自分の判断が正當なものも考へて暫くの間懲らしめる。然かも其の判断は間違ないと言ふ譯でもなく、時として其の子の發達を妨げるやうなことも行ふ。長い目で見れば飛んでもない誤謬であつたことを誠實だと思つて行ふ。靈魂の父……その聖潔に與らんとて。然るに靈魂の父の折檻は萬一にも誤りなく、其の道德的性狀の本質たる至聖性に由る永久の關係である。それを以て我らは其の眞の子たることを悟る。十一、凡ての懲戒今は喜ばしと見えす反つて悲しと見ゆ。然し其の折檻中にある間は唯だ苦悶に外ならないことを基礎として著者は獎勵を與へるのである。練習する者に、義の平安なる果。其の暴風一過忽ちに祝福の裕かな結果が酬ひられる。其の訓練から生ずるものは最高の道德的標準に適應する義の成績が與

へられて平安を得る。十二、されば衰へたる手、弱りたる膝を強くし。斯くの如き苦痛は子たる證據で道德的進歩のためであるからして、そのために心の衰へた信徒を鼓舞し、其の努力を新たにせんことを激勵しなければならぬ。イザヤ三十五の三からの引用と思はれる。即ち信仰の健全なものが動搖してゐるものを蔽護せねばならないと言ふ。十三、足蹇へたる者の履み外すことなく、反つて醫されんために汝らの足に直なる途を備へよ。一方に弱いものを蔽護するに同時に彼らの前に妨害となるものを置かないやうに注意せねばならない。そのうちには跛足のものもあらう。故に其の途が凸凹であれば基督教の競走に足を滑べらして途から轉落するものも出來やう。其の途が滑らかならば、足を使つたために、却つて其の足が醫されて走り覺えることもあらう。箴言四の二十六からの引用である。何れにもあれ、其の躓きとなるものを除いて注意深く顧みるか否かが、教會の健全なるか、不健全なるかの岐れる所である。故に深く注意せよと言ふ。

教會の純潔

十四—十七

十四 力めて凡ての人と和ぎ、自ら潔からんことを求めよもし潔からずば、主を見ること能はず。十五 なんぢら慎め、恐らくは神の恩恵に至らぬ者あらん。恐らくは苦き根はえいでて汝らを惱まし、多くの人これに

由りて汚されん。十六 恐らくは淫行のもの或は一飯のために長子の特権を賣りしエサウの如き妄なるもの起らん。十七 汝らの知るごとく、彼はそののち祝福を受けんと欲したれども棄てられ、涙を流して之を求めたれど回復の機を得ざりき。

讀者は平和と聖潔を追求むるを要する。而して教會の純潔に心を用ひねばならぬ。さもなければ背教、不潔、俗化に陥る虞れがある。故にエサウが其の熱望する祝福を求めて得なかつた實例に鑑みて深く省みるを要する。

十四、カめて凡ての人と和ぎ、自ら潔からんことを求めよ。此の小團體の中にも自我主義が攪き廻してゐたのであらうミファアラは解してゐるが、ビイクは基督者も等しく非基督者も仲好くせよと言つたのであるを解してゐる。故に次の句のやうに其の平和のためと言つても其の主義を犠牲にしてはならないことを警告したものであると言ふ。もし潔からずば主を見ること能はず。『潔き』は十の十に言ふ聖別である。新約に於いて神に近づく儀典的の準備は舊約の儀典と異り、道德的の穢れから其の良心を潔めることである。それなくば人は神を見ることは出来ない(マタイ五の八参照)。ドツツはヘブル人の事情は争鬪心を直ぐに煽る癖があつて、其の直ぐな途を外れた弱い人々を除外する感情が激しかつた。故に彼らを直ぐに除外してはならない、其の信仰を恢復するためには争鬪や憤怒の

心の起らないやうに平和に處理せよ、基督の犠牲を眞に受けて、其の良心を潔めることが神との交際に禮拜者を伴ふと言つたものを解してゐる。十五、汝ら慎め、恐らくは神の恩恵に至らぬ者あらん。單に個人の純潔が必要のみならず、教會の純潔に志さねばならぬ。教會は其の一會員の墮落に由つても即時に影響を受けるからである。恐らくは苦き根はえいて、汝らを惱まし、多くの人これに由りて汚されん。斯くの如き會員は教會全躰の成育に靈的活力を送る根に黴菌を生じたやうなものである。申命記二十九の十八から思ひ着いたものと考へられる。其の黴菌は背教か不信か、不道德か、非靈的か兎も角神の恩恵から離れ去る行動を爲す人々である。十六、恐らく淫行のもの、或は一飯のために長子の特権を賣りしエサウの如き妄なるもの起らん。『淫行』は文字の通りで、決して神に對する不貞の譬ではあるまい。次は偶像禮拜に誘はれる虞があつた。エサウは其の宗教的な特権を物の數も考へてゐなかつた。故に一飯の食のために輕々しくそれを讓つた。ヘブルの基督者も、基督にある希望から引き割いて其の苦勞から免れ、慰安を得やうとする誘惑に日々接してゐた。十七、汝らの知る如く、彼はそののち祝福を受けんと欲したれども棄てられ、涙を流して之を求めたれど回復の機を得ざりき。彼は其の家督の權を輕々しく放棄して後に、之に伴ふ祝福が欲しくなつて涙を流したがそれは慾望から自分が其の權を輕視したことを悔ひたものではなかつた。創世記二十七の一―四十一の物語であ

る。若し彼らが基督に宿る其の祝福を取り遁がして誘惑や壓迫に従ふならば、再び取り返しのつかない行動に陥るものであると言ふのである。勿論此れはエサウの全生涯を取つて譬こしたのではない。其の家督の權を賣つた行爲に就いてである。

舊い契約の恐しさと新たな契約の榮光

十八—二十四

十八 汝らの近づきたるは、火の燃ゆる觸り得べき山・黒雲・黒闇・嵐、十九 ラツバの音、言の聲にあらざ、この聲を聞きし者は此の上に言の加へられざらんことを願へり。二十 これ『歌すら山に觸れなば、石にて撃るべし』と命ぜられしを彼らは忍ぶこと能はざりし故なり。二一 その現れしところ極めて怖しかりしかばモーセは『われ甚く怖れ戦けり』と云へり。二三 されど汝らの近づきたるシオンの山、活ける神の都なる天のエルサム、千萬の御使の集會、二三 天に錄されたる長子どもの教會、萬民の審判主なる神、全うせられたる義人の靈魂、二四 新約の仲保なるイエス及ひアベルの血に勝りて物言ふ瀝の血なり。

舊新契約の比較が此の項目に至つて最高頂に達する本書翰の中心點である。其のために著者は舊新兩制度の對照を掲げるのである。舊い契約は其の性質が官能的で神に近くここを得ないが、新たな契約は天に屬し神にも天使にも耶穌にも死んだ聖徒にも近づくを得る。即ち舊約は官能的物質的の形で與へられたが、新約は天に屬して、目を以て見るを得ない。音にそのみならず舊約は畏懼

戰慄すべき隔壁を以て人間の神に近くここを許さないが、新約は天使や死んだ聖徒へ、神へ又其の血に由つて祝福を與へられる耶穌へ近づくかしめ、天に我らを伴ふ。斯くの如き偉大な特權が警戒しつゝ、心を配る動機たらしめる。新約は神の恩寵の最高の顯現である。故にそれから漏れないやうに細心の注意を要するこ。

十八、汝らの近づきたるは、火の燃ゆる觸り得べき山、黒雲、黒闇、嵐。著者が言ふのは申命記四の十一、五の二十二、出エジプト記十九の十六—十九の事實である。二十二節のシオンの山に對照して、此所に『山』を入れたのは譯者の用意で、最も準據すべき寫本には此の語はない。山は火焰のために其の姿が見えず、其の聖なる者たちの雲霞の大軍に取り圍まれ給ふ神は風を御使し、焰を其の奴僕さなし給ふた。要するに斯くの如き物質的、恐しい性質のものを列べて書いたのは舊約が築かれる啓示の姿を表さうとするのである。十九、ラツバの音、言の聲にあらざ。十八節の名詞から續いて『にあらざ』の打ち消しが掛つてゐるここを見遁さないやうに。前譯には十八節に『捫はるべき山に非ず』として打ち消しを明かにしてゐる。出エジプト記十九の十六、十九、二十の十八、申命記四の十二。要する『諸君の近づいてゐるのは舊約の諸書に記録されてゐるやうな恐しい神の顯現ではない。舊約では斯く斯くの恐しい事實が示されてゐる』と言ふにある。即ち『今は新約の時代であ

んな恐しい姿で神が物言ひ給ふたときとは全く事情が異なる』と言はうとするのである。この聲を聞きし者は此の上に言の加へられざらんことを願へり。出エジプト記二十の十八―二十。申命記五の二十三―二十七。舊約の此のときの民衆は其の畏懼すべき光景に驚き怖れて神が物言ひ給はないやうに戦慄しつゝ、モーセに請ふた。二十、これ『獸すら山に觸れなば石にて撃るべし』と命ぜられしを。出エジプト記十九の十二、十三。聖句其のまゝの引用ではないが、意味を示してゐる。無意識に其の山に觸れたものでも死刑に該當するほご、それを聖なる所とせられた意味である。エホバが其の山にいまし給ふが故に神聖であると言ふのである。全く唯物的な見方である。而して斯くの如き命令なるが故に前節のやうにモーセに要求した。二十一、その現れしところ極めて怖しかりしかばモーセは『我甚く怖れ戦けり』と言へり。此れはシナイ山の啓示の所にはない句であるが、黄金の犢を造つた事に就いての物語の中にモーセは『エホバ忿怒を發し憤恨を起し汝らを怒り滅さんとしたまひしかば我懼れたりしが』(申命記九の十九)と言つてゐる。恐らく著者はユダヤの傳説に従つて斯く言ふのであらう。二十二、されど汝らの近づきたるはシオンの山、活ける神の都なる天のエルサム、千萬の集會。シオンはエルサレムの建設せられてゐる山。それを神と天使と聖徒の住む理想的靈界の都に譬して用ふる本文に就いて此所に問題を生ずる。詩篇九の十一、七十六の二には『シオンに住み給ふエホバに

對ひて』と言ふ。その言味に於いて『シオン山即ち活ける神の都なるエルサレム』と解する、同じく詩篇百四十六の十、イザヤ一の二十七の『シオンよ、汝の神は萬代まで統御め給はん』と言ふ意味で『其の民集合し、神は彼らに現はれ給ふ所』と解せられる。山と都とは神の民が神に侍らんがために集合し、活ける神は其の永遠の充ちたる徳を名残なく顯はし給ふ所とせられてゐる。二十三、天に録されたる長子どもの集會、萬民の審判主なる神、全うせられたる義人の靈魂、『天に録されたる長子どもの集會』を詩篇八十九の五『潔きものの會』と解し、又天使の集會と解する人々がある。人間の集會とすれば次に『全うせられたる義人の靈魂』とあるので二回數へられることとなるので解釋が困難となる。ピイク、ドツツ、其の何れも前のを『天使の集合』と解してゐる。『萬民の審判主なる神』は天使と萬民の神で、天の都に於ける至高の支配者の意味。『全うせられたる義人』は舊約新約の全時代に亘る聖徒を指すものと解して然るべきであらう。二十四、新約の仲保なる耶穌及びアベルの血に勝りて物言ふ瀧の血なり。著者は更に我らが神に近づくを得る新約の仲保者耶穌を加へる。『耶穌』は救の嚮道者で神の都に到る途を開かれ、我らが隨伴して其所に入るを得る仲保である。耶穌は人間の名を以て掲げたのは我らと同情同感し人間の經驗を有せられることを示す。アベルの血は其の復讐の叫びを以てカインを良心の苛責から神の前を去つて漂浪の旅に出さしめたが、耶穌の血

は罪の赦を叫び、良心を潔め、天の住家を與へるために神の前に耶穌の血を流さしめたものさへも伴ひ來る。以上の數節に由つて讀者に彼らが既に天のエルサレムに伴はれ、其の住民の數に加へられてゐることを示さうとするのである。未だ明確にそれを經驗に認めらなくとも、信仰に由つて其所へ進み得ることを示さうとするのである。

天よりの御聲 二十五—二十九

二五 なんぢら心して語りたまふ者を拒むな、もし地にて示し給ひし時これを拒みし者ども遁るる事なかりしならば、況して天より示し給ふとき、我ら之を退けて遁るることを得んや。二六 その時、その聲、地を震へり、されど今は誓ひて言ひたまふ『我なほ一たび地のみならず、天をも震はん』と。二七 此の『なほ一度』とは震はれぬ物の存らんために震はるる物、すなはち造られたる物の取り除かるることを表すなり。二八 この故に我らは震はれぬ國を受けたれば、感謝して恭敬と畏懼をもて御心にかなふ奉仕を神になすべし。二九 我らの神は燒盡す火なればなり。

讀者は神の最後の啓示に耳を塞いではならない、若しシナイ山上からの啓示さへも之を顧みないのに刑罰が免されなかつたことすれば彼らに與へられた啓示は永遠のものを彼らに示し、其の本質的の權威を以て神を示す以上、之に心を向けられないものには更に由々しき刑罰が與へられるであらうと

警告するのである。

二五、汝ら心して語り給ふ者を拒むな、若し地にて示し給ひしとき……遁るる事なかりしならば、況して天より示し給ふとき遁るることを得んや。二の一—四及び十の二十八—三十一の警告と同様である。シナイ山より語り給ふ者も新しき啓示に由り語り給ふ者も等しく神である。神は其の自然界の懼るべき事變の中から再び物言ひ給はないやうにとイスラエルが要求し、神も亦『彼らの言ふ所は皆善し』(申命記五の二十八)と之を認容せられたに相違はない。然し今神は天から我らに物言ひ給ひ、更に偉大な威力を其の御語に示される。而して之に背く者には更に苛重な責任を問はれる。二六、その時その聲、地を震へり、されど今は誓ひて言ひ給ふ『我なほ一たび地のみならず、天をも震はん』と。律法の授けられたとき地は震つた(出エジプト記十九の十八)然るにハガイは天と地とが共に震ふべきがあることを預言してゐる(二の六、二十一)。その預言はペルシヤ王國の轉覆とメツシヤ王國の發端を指したものである。それを著者は自ら間もなく來ることを考へた基督の再臨に當筈めたものである。ユダヤ人は地上の事件は天の守護者に由つて司どられるものとして考へた。恰かも支那の昔の人たちが地上の人や國の運命が天の星に由つて司られることを考へたのと同様である。故に王國の覆没は地上に影響するのみならず、天にも影響することを考へた(イザヤ二十四の二十一、二十二、三十四の四、五)



『なほ一度』は最後の事件を指す。二十七、この『なほ一度』とは云々。即ち最後の天地の震動で、造られたる物、物質は取り除かれる。それは元來が物質で滅亡すべき性狀を有つたものであるからである。而して實在のものは天に屬し、永遠の物は我らの王國のものにして残留する。斯くの如き機會が今一回到來すると言ふ。二十八、この故に我らは震はれぬ國を受けたれば感謝して、恭敬と畏懼とをもて御心にならざるべし。我らの屬してゐる御國は斯くの如く物質的宇宙の滅亡に更に關係のない場所である。故に不斷に神に奉仕して感激しつゝ、之を與へ給ふた神に謝恩の念に充ち満ちてゐなければならぬ。同時に神の畏るべき威嚴を尊崇して敬虔謹慎之に事へねばならぬ。二十九、我らの神は燒盡す火なればなり。申命記四の二十四からの引用である。シナイ山上に神のいますことを示した火や煙は其の至聖を妨げ抗争する惡を滅絶せしめる至聖性の象徴であつた。物質的火焰なるのみならず、其の靈的焔たる神に事へてゐることを忘れてはならない。

## 第拾參章

基督教の社會的顯現に對する訓誨

一一六

一 兄弟の愛を常に保つべし。二 旅人の接待を忘るな、或人これに由り、知らずして御使を舍したり。三 己も共に繋がるるごまぐ囚人を思へ、また己も肉體に在れば、苦しむ者を思へ。四 凡ての人、婚姻のこゝを貴べ、また寢床を汚すな。神は淫行のもの、姦淫の者を審き給ふべければなり。五金を愛するこゝもなく、有てるものを以て足れりませよ。主みづから『われ更に汝を去らず、汝を捨てじ』と言ひ給ひたればなり。六 然れば我ら心を強くして斯く言はん。『主わが助主なり、我おそれじ。人われに何をか爲さん』と。

讀者が兄弟互に相愛し、親切を旨とし、迫害を受くる者を心に留め、純潔な節操を保ち、貪慾を慎まんことを勧める。其の勸告の順序は前に述べ來つた通りを追つてゐる。

一、兄弟の愛を常に保つべし。初代教會の最も美しい特質は基督者が互に相愛した點でそれが異教徒に最も深い感激を與へた。然し此の團體が困苦艱難の下に於いて會員間に自ら冷やかな氣風が生じて來たこゝを著者は見て取つて斯く勧めたのであらう。異説が教會の中に闖入して、協同の信仰が衰へ、其の熱心がさめて來るこゝ、愛情が冷へて來る危険がある。二、旅人の接待を忘るな、或人これに由り、知らずして御使を舍したり。ユダヤ人が其の同胞を歡待するのは他國民に見られない美しいものがある。初代の基督者も亦其の同信の兄弟を迎へるのに甚だ手厚い態度を取つた。此れがために亡命者などを匿まうこゝとなつて危険にさへ陥つた。それで信仰の薄らいだ基督者は他人の身の上

を思ふよりも自分の安全を謀つて旅人を冷遇する虞れがあつたものと思はれる。尙ほ天使を歡待した物語は創世記十八章—十九章に記されてゐる。士師六の十一—二十四十三の二—二十三參照)。三、己も共に繋がるごとく囚人を思へ、また己も肉體に在れば、苦しむ者を思へ。基督のために入獄してゐるものを思へと言ふのである。自らを其の地位に置いて同情しなければならぬ、其の肉體を以て苦難に會つてゐるものを、自分も肉體を有してゐるから考へよと言ふ。コリント前書十二の二十六に言ふ基督の體の一部が苦しめば全體が苦しむと言ふ意味に解する人もあるが、それは思ひ過ぎであらう。バアベチユアの殉教記に由る二人の執事が彼女を訪問するために選定せられ、獄中の彼女の憂を慰めたことがある。斯くの如く初代基督者は此の本文其のまゝを實行してゐた。四、凡ての人、婚姻のことを貴べ、また寢床を汚すな。神は淫行のもの、姦淫の者を審き給ふべければなり。婚姻を貴べしは、單に結婚を大切にせよと言ふのみではない。結婚したものが其の家庭生活を純潔にせよとの意味も加はつてゐる。「いくら仕立屋の拂に義理を缺かなくとも、其の妻に放縱では、正しい道德家は申せまい」(ウキリアム・ペン)。妻に對するの放縱が往々家庭で正當な夫の理想が行はれない基となる。其の審判は各方面に現れて來る。五、金を愛することなく、有てるものを以て足れりせよ。「武人錢を愛す」と言つて昔の武士は貪慾を卑んだ。蓋し昔の武士は道德の先達を以て自ら任

じてゐたからである。金を愛すると言ふことは神が人間の前途を注意しつゝ、攝理を以て導き給ふことを裏切るからである。或はそれはのんきとなり、遊惰の口實となること掛念する向があるが、遊惰で、貧しいものは決して金錢を愛しないのではない。そんな人物ほご不當な金を貪らうとする。故に此の嚴かな警告は決して悪用は出來ない。後の句は攝理に信頼せよと言ふのである。六、然れば我ら心を強くして斯く言はん「主我が助主なり、我おそれじ。人我に何をか爲さん」と。詩篇百十八の六からの引用である。以上兩節は讀者の特殊の事情に就いての勸告に相違はない。如何に人間が暴舉を企てても神の御旨を破ることは出來ない。目下社會に於ける不安にも、神の御旨に従ひ、其の命じ給ふ所に慎んで従ふ志があれば、何時も神に信頼して不安はない譯である。

## 異端に警戒しユダヤ教を離れよ

七—十七

七神の言を汝らに語りて汝らを導きし者どもを思へ、その行狀の終を見てその信仰に效へ。ハイエス・キリストは昨日も今日も永遠までも變り給ふことなし。九各様の異なる教のために惑さるな。飲食によらず、恩恵によりて心を堅うするは善し、飲食によりて歩みたる者は、益を得ざりき。十我らに祭壇あり、幕屋に事ふる者は之より食する權を有たず。十一大祭司、罪のために活物の血を携へて至聖所に入り、その活物の

體は陣營の外にて焼かるるなり。十二、この故にイエスも己が血をもて民を潔めんが爲に門の外にて苦難を受け給へり。十三、されば我らは彼の恥を負ひ、陣營より出でてその御許に往くべし。十四、われら此處には永遠の都なくして、ただ來らんとする者を求むればなり。十五、此の故に我らイエスによりて常に讚美の供物を神に献ぐべし、乃ちその御名を頌むる口唇の果なり。十六、かつ仁慈と施濟を忘るな、神は斯のごとき供物を喜びたまふ。十七、汝らを導く者に順ひ之に服せよ、彼らは己が事を神に陳ぶべき者なれば、汝ら靈魂のために目を覺しなるなり。彼らを歎かせず、喜びて斯く爲さしめよ、然らずば汝らに益なかるべし。

ヘブルの信者は其の先進者の教訓と行動とを堅實に學び、ユダヤ教の思想を全く棄て、基督を信するより生ずる耻を忍び、善行に忠信なれど著者は勸告する。

七、神の言を汝らに語りて汝らを導きし者どもを思へ。その行狀の終を見て其の信仰に效へ。彼らを導いたものとは彼らが福音を授けられた人々の事である。即ち死んだ指導者でヘブル人に福音を授けた而して今は世になき二の三、四の二に言ふ人々の事である。彼らの死んだ有様を好く記憶して其の最期を飾つた信仰に倣へ。勿論それが殉教であつたとは言つてゐない。著者は其の初代の信者三信仰を共にしてゐるが、それから離れ去る心配のある人々があつたのであらう。八、耶穌基督は昨日も今日も永遠までも變り給ふことなし。此の句は前句より更に後に續く數句に關係する。耶穌基督は今も變り

はないから既に死んだ先輩に對すると同様に彼に倣へと言ひ、更に永遠の後でも變り給ふことはないから節操を變へてはならないと言ふ。九、各様の異なる教のために惑さるな。讀者が新約の仲保たる基督に對する執着を等閑にして舊約の制度や實行に傾くことを誠めるのである。斯くの如き教は一方では傾くかと思ふ一方では又舊い教義に傾くと、言ふやうに様々なる。飲食によらず恩恵によりて心を堅うするは善し。讀者が今動搖して不満の状態にあるのは其の心を養ふことの出来ない食物に就いての教理に由らず、恩恵に支配せられる神の御座に近くづ信賴と不動の精神に基くを要する。即ち四の十六の勸告に従ふにある。此所で言ふ飲食とは次の節に示す犠牲の食物を指したもので、禁慾主義のこゝでもなく、潔きもの潔からざるものの區別を唱へるのではない、犠牲の食物と言ふにある。飲食によりて歩みたる者は益を得ざりき。それは全く要なきこゝが經驗から知られてゐる。犠牲の食物は基督者が神に近くするには障碍である。それは基督者の祭壇は祭司も禮拜者も食ふ權利を有しないこゝ次に示す通りだからである。十、我らに祭壇あり、幕屋に事ふる者之より食する權を有たず。基督者の祭壇は其の『幕屋に事ふる者』即ち祭司も、禮拜者も其所から食物を食ふこゝは出来ない。それは、十一、大祭司、罪のために活物の血を携へて至聖所に入り、その活物の體は陣營の外に焼かるるなり。恰かも贖罪の日に大祭司が至聖所に血を携へて入つて、其の屍は食はず、陣營の外で焼却

するのと同様である。それと同様に其の血に由つて民衆の罪を潔め給ふ耶穌は門の外で苦み給ふた。「犠牲の畜の焼却はそれを純化するために行はれるのではなく、それを棄てるために行はれた。屍體は贖罪に何の關係もない、既に血を取つた以上は何の意義もなかつた。故に生命即ち其の贖罪の能力は血にのみ存在する。故に耶穌の肉體には何らの職能はない。十二、この故に耶穌も己が血をもて民を潔めんが爲に門の外にて苦難を受け給へり。著者は言ふ。斯く一方に耶穌の復活の事實は充分に認めてゐるが此の論理の中に神學上の意義は少しも籠めてゐない」(ビイク)。其の『苦難』は十二の『耻』の同意義で、罪人としての死の耻辱が其の苦難の本質的要素であつた。耶穌は人に棄てられ、呪はれたことを切實に感得せられた。然かもそれに由つて耶穌は人間を捕へ給ふた。十三、されば我らは彼の恥を負ひ、陣營より出てその御許に往くべし。故に汝らの舊友に棄てられ、ユダヤ人としての特權を失ひ、叛逆者、不逞漢の銘を打たれても沮喪するな。それは基督に近づき、基督に偕なる途であるからであると。一方には日本人として賣國奴の如く罵られ、一方には時勢に反する舊守家と蔑視せられるのも同様であらう。汝らの特權に服従することは深く悲しむべきの損失ではない。著者は勧める。十四、我ら此處には永遠の都なくして、唯だ來らんとする者を求むればなり。「神の造り給へる基ある都」(十一の十)、「天のエルサレム」(十二の二十二)は此の世にはない。靈的にし

て永遠のもの即ち「神の都」、「天のエルサレム」のみ其の向上心に満足を與へ、其の情念を一杯に充實する。故に此の世に認められんことを慾望、地上の住家は之を思ひ切つても差支へはない。十五、此の故に我ら耶穌によりて常に讚美の供物を神に獻ぐべし。耶穌は以上に言ふやうな供物を獻げ給ふたが、基督者も罪に對して斯くの如き供物を獻げることが出来ないが、唯だ讚美の供物を獻ぐるを得る。それも基督の罪祭に由つて神に近づくことを得るのみであるから基督の御名に由る。而して「常に」に心に留めて讚美を獻げねばならない。神の美はしきは到底言語を以て言ひ表すを得ず、神に對して二六時中其の心を通はしてゐなければならぬからである。口唇の果なり。ホゼヤ十四の二から貸りて來た表現である。十六、仁慈と施濟とを忘るな、神は斯のごとき供物を喜び給ふ。唇の讚美のみでは充分ではない。基督者は其の仲間に奉仕の犠牲を獻け特に日用の事を缺く人々には物質を以て之を援助すべきである。斯くの如き讚美と慈善の犠牲は神の最も喜び給ふ所であると。十七、汝らを導く者に順ひ之に服せよ、彼らは己が事を神に陳ぶべき者なれば汝らの靈魂のために目を覺しませるなり。第七節に言ふ此の世を去つた先覺者に忠順であると同時に現在彼らを治めてゐる人々にも忠順でなければならぬ。唯だ其の命に服すると言ふのみならず、其の望んでゐるやうに向はねばならない。恐らく教會に分争分派の虞れがあつたものであらう。而して彼らは寢ずの番をしてゐる牧

羊者のやうに、又其の生死の境にある病氣を看護するやうに各人の靈魂の安危に心を注いでゐるかである。彼らが其の指導者の命に服しないことは其の教訓に同感しない意味で、彼らに何らの益をも與へないと言ふ。

祈禱の要求

十八—十二

十八 我らの爲に祈れ、我らは善き良心ありて凡てのこゝ正しく行はんと欲するを信するなり。十九 われ速かに汝らに歸るこゝを得んために、汝らの祈らんこゝを殊に求む。

彼らの清廉を言明しながら彼らの祈らんこゝを要求し、又速かに志の通り歸住し得るやうにと祈らんことを要求する。

十八、我らの爲に祈れ、我らは善き良心ありて凡てのこゝ正しく行はんと欲するを信するなり。ピイクは代名詞に復數で用ゐるものを、次の節で不意に單數を用ゐるのは決して偶然ではなく、著者が此所では其の周圍の人々の事をもこめて言ふのであると解してゐる。即ち著者は教會の指導者の一人で他の役員か或は信者をこめて言つてゐる。而して何れにしても何らかの疑を以て見られてゐるが、良心に曇なきを言明するのである。十九、我速かに汝らに歸ることを得んめに。著者は自分が出來るだ

け速かに歸住し得るやうに祈つてくれと言ふ。故に彼が其の宛てゐる教會と密接の關係を有し、或は其の指導者の一人であつたらうと思はれる。何らかの事情で今は別な場所にある。それは勿論自由速かに歸り得る望があつたとすれば牢獄ではなかつたであらう。

著者の祈と頌榮句

二十一—二十一

二十 願くは永遠の契約の血によりて、羊の大牧者となれる我らの主イエスを死人の中より引上げ給ひし平和の神、二一 その悦びたまふ所を、イエス・キリストに由りて我らの衷に行ひ、御意を行はしめん爲に凡ての善き事につきて、汝らを全うし給はんこゝを。世々限りなく榮光、かれに在れ、アマメン。

二十、願くは永遠の契約の血によりて羊の大牧者となれる我らの主耶穌を死人の中より引上げ給ひし平和の神此れは何れの註解者も本書翰中基督の復活を掲げた唯一の句と認めてゐる。其の語は本書翰全體に亘つて論究した耶穌の天の至聖所に入られたこゝを言ふものと理解されるけれども尙ほ復活に就いて言つた語句が強く現れてゐる。著者は血に由つて耶穌を復活せしめられたと言ふのか、血を有する牧羊者として死から引き上げ給ふたと言ふのか、明かではない。後の『平和の神』は教會の紛擾を癒し給ふ神と言ふのではない。其の苦悶を鎮め靈魂の内部の調和を整へ給ふ神と言ふので

ある。尙ほ『羊の大牧者』とはイザヤ六十三の十一参照。『耶穌が羊のために其の生命を與へ給ふたのは大牧者としてであつた。而して此の行動に由つて其の民の牧者たるべき權能を確立された。又終の日に彼らを甦らしめ、一人をも失はれない保證は此の權能に由る』(ドツツ)。二十一、その悦びたまふ所を耶穌基督に由りて我らの衷に行ひ……汝らを全うし給はんことを。凡ての恩寵が其の民に授けられるのは今基督として宇宙を統治し給ふ耶穌に由つてである。而して其の全うせられることは我らが神の御心を爲す意味で、それは基督が我らのうちに作用<sup>はたら</sup>き給ふに由つてのみ爲すを得る。其の基督の行動こそ神には悦びである。世々限りなく榮光彼にあれ。これは『彼に』が神に對してか、基督に對してから明ではない。『本書翰の中心目的は基督の至高性を示すにあつた。其の結末の頌榮句も亦基督に對するとするのが至當である』(ビイク)。『本書翰全體に亘り著者の心にあつた最大の姿で、又今名指したばかりの耶穌基督に對するものとするのが一層至當である』(ドツツ)。

結末の辭及び挨拶

二十二—二十五

二二 兄弟よ、請ふ我が勸の言を容れよ、我なんぢらに手短く書き贈りたるなり。二三 なんぢら知れ、我らの兄弟テモテは釋されたり。彼もし速かに來らば、我かれと偕に汝らを見ん。

二四 汝らの凡ての導く者、および凡ての聖徒に安否を問へ。イタリヤの人々、なんぢらに安否を問ふ。

二五 願くは恩惠、なんぢら衆と偕に在らんことを。

二十二、兄弟よ、請ふ我が勸の言を容れよ、我汝らに手短く書き贈りたるなり。著者は此の勸告が善意を以て迎へられんことを求めるのである。蓋し此の書翰に由つて讀者の良心に不安を與へることを感じたからであらう。彼らに對して著者は言ひ過ぎたやうに思はれるに感じて斯う附け加へたものである。二十三、汝ら知れ、我らの兄弟テモテは釋されたり。彼もし速かに來らば我彼と偕に汝らを見ん。何時ある。何處に、如何なる理由で捕縛せられたかは全く不明であるが、兎も角テモテが入獄してゐたことは此れで明かである。而して此の放釋が同信の基督者に安心を與へる事情にあつたので報告したものに相違はない。尙ほ著者は自由に彼と共に行き得る事情にあることが窺はれる。二十四、汝ら……導く者、聖徒、此の書翰は團體全部に宛たものでないことが此の挨拶の書風で明かになる。恩惠蓋し教會を代表する一二の役員に宛たものと思はれる。イタリヤの人々。緒論を参照。二十五、願くは汝ら衆と偕に在らんことを。テトス三の十五、コロサイ四の十八、テモテ前書六の二十一も同様簡結果な祝禱である。

新約聖書  
註解

へ  
ブ  
ル  
書  
終

録附  
(1) ユダヤの祭日及び儀典



過越節の食事(サマリヤ人)

過越節の食事(サマリヤ人)



## ユダヤの祭日及び儀典

四福音書及び使徒行傳の註解に際してユダヤの祭日に就いて特に説明を試みる事が至當と思はれたけれども、其の暇のなかつたことを遺憾とする。然るに本講に至つて更に儀典や祭日の引用が屢々行はれるので、此所に更めて説明することとする。勿論それを詳細に記述することは餘白が許さないのであるが、唯だ新約全書の研究に關聯する點を主としてバビロン幽囚後行はれて來た所を陳べて置くこととする。

バビロンの幽囚はヘブル民族の思想にも習慣にも著しい變化を與へたことは前項の歴史を通讀せられるならば想像するに難くないと考へる。祭日や儀典にも亦それが大いなる影響を與へた。然し其の發端や意義に就ては、幽囚前と何等の變りもないもののあることは言ふまでもない。それらは既にエジプト記三十五章―四十章、レビ記全卷、民數紀略一の一―十の十八に於ける制度に見られる。

一、「過越祭」此れはエジプト記十二の二十一―二十七に示される通り、エジプトを遁れるに當りて羔の血が門に塗られた家は其の長子を撲ち殺されることを免れた恩寵を記念する爲であつた。此れはユダヤの各家庭に於て守られ、同時に後年の制定に従つて、其の家からパン種はニサンの月

の十三日と十四日の間に悉く取り除かれた。それはヨハネ十九の十四（マルコ十五の四十二、マタイ二十七の六十二参照）に『過越の準備日』と稱する日に當る。十四日の正午までに種入れたパンは食べて後は、その一片でも悉く粉碎して棄てた。過越に用ふる羔又は小山羊がニサンの月十日に選定せられるのであるが、それは當歳のもので少しの疵もないものでなければならなかつた。羔は同月十四の夕暮に屠殺し、其の骨を折らないやうに特別の注意が施された（出エジプト記十二の四十六）。ペサアヒム（ユダヤ教文書）に據るに、其の骨を折つたものは四十に一つを減じた笞刑に處せられた。其の肉は創世記九の四、レビ記七の二十六以下、十七の十一五の規定に従つて其の血を冒さないやうに之を灑ぎ出して、火に炙り、種なしパン、若菜と共に食した。而して其の残りのものは朝まで食すまで火で焼き盡くした。之を食する資格のあるものが此の儀式から漏れることは嚴重に禁ぜられた（民數紀九の四―十四）。外國人にも雖も割禮ある者は之を拒むことは出来なかつた。然し何らかの理由で一時資格を失つたものは之に與かることを得ず、特に行はれる第二の過越日即ち一ヶ月後に於て之を守らねばならないとせられた。

種なしパンを食ふ過越に續く七日に就いては面倒な規定が設けられた。それは民數紀略二十八の十六―二十五に載せてゐる。ニサンの月の十五日は『聖なる集會』の日で、何人をも勞働せしめて



除酵パンの製造（サマリヤ人）

はならなかつた。此の日及び續いて二十一日まで特別の犠牲が供物とせられた。即ち民數紀二十八の十九に規定にある。レビ記二十三の十に由るに、特殊の儀式を安息日の次の朝、即ち十六日に行ふべきを規定してゐるが、それは『オメル』の奉獻で、祭司が大麥の束をエホバの前で打ち振る儀式である。同時に穀物の供物と共に燔祭として疵なき當歳の牡の羔を犠牲に献けた。

二、『七週の祭』即ちペンテコステ。ペンテコステの計算に就いては色々な議論がある。然しそれはニサンの月十六日、大麥を振る供物の日から起算するのである。従つてペンテコステはシヴァンの月六日に相當する。ペンテコステには初穂として種を入れた二つのパンに疵なき當歳の羔七個の燔祭とが献けられた。其の他供物の細目はレビ記二十三の十五―二十一、民數紀略二十八の二十六―三十一に示されてゐる。

三、『假小屋（構蘆）の祭』チスリイの十五日から二十二日までに及ぶ。其の第一日（十五日）は聖集會の日で公同禮拜が行はれ、勞働は禁ぜられた。其の特別な儀式は棕栢の葉や柳の枝や其の他大木の枝で假小屋を建てることである。民數紀二十九の十二―十六には其の第一日に献ぐべき特別の供物を規定し又十七―三十八には動物の供物、素祭、灌祭を献ぐべきことを規定してゐる。而して七日の間毎日之を行ひ、最後に其の翌日大集會を催して祭は終る。

其の祭の方法は時代に由つて多少の相違があつた。従つてネヘミヤ八の十五以下には假小屋をオリブの枝、油木の枝、烏枯の枝、棕櫚の枝及び茂れる木の枝を以て造り、家の屋根や、庭や、神の家、庭、水の門の廣場、或はエフライムの門の廣場に設けよと言つてゐる。後年のユダヤ文書に由ると十五日の早朝に祭司は行列を隨へてシロアムの池に降り、金の器に其の水を汲み取つて、神殿に歸り、朝の犠牲を獻げる祭司の一團に加つた。其の他の行事は之を詳しく述べる必要もないのであるが、唯だ此の水を汲む儀式は基督の時代まで行はれてゐたこと認められるので、基督が此の祭の最後の日に『人もし渴かば我に來りて飲め』と仰せられた御語を解く便りとなつてゐる。

次にバビロン幽囚後二三百年を経て制定せられた祭日に就いて一頁研究を要する。

第一は本書翰の註解に屢々陳べた『贖罪の日』即ち祭と言ふよりも斷食の日で、チスリイの月十日に守つた（使徒行傳二十七の九）。それは『大安息日』と稱する『聖き集會』の日で其の日には勞働を禁じ、イスラエル人、故國生れの奴隸は勿論、外國人の住民も亦『身を惱ますべし』（レビ記十六の二十九以下、二の三十二十七—三十二）と規定した。其の終日に亘る儀式は其の性質が特に罪の贖を意味し、贖罪を爲すべき犠牲の儀式を反照するものであつた。而して罪と穢きの意義を高調するのであつたのみならず、其の祭期全般を通じて、即ち九日の夕から十日の夕まで祭は大祭司

一個に集中せられた。而して其の職責は幽囚後に定められたものであつた（ゼカリヤ三の一）。其の日の特殊の供物は民數紀二十九の七一十一に載せられ、假小屋の祭の第八日（チスリイの二十一日）と同様である。一方大祭司のために設けられた祭の次第はレビ記十六の三—二十八に細目を掲げてゐる。即ち大祭司は先づ水浴の後リンネンの帶ミターバン（帽子のやうに頭に巻く布）と共にリンネンの上衣を着る。次に自己と其の家族のための罪祭として贖ミ燔祭として牡羊を携へる。然し民の贖罪には小山羊が燔祭として獻けられ、又二匹の牡山羊が選ばれる。次に其の詳細に亘つて規定せられる特別の儀式が行はれる。而して二匹の牡山羊は籤を以て一匹はヤアウエに、一匹はアザゼル（砂漠の惡靈と思はれるが）に獻げるものとして定められる。贖は大祭司と其の家族のための贖罪として供へられるのである。次に香壇には燔祭の祭壇から取つた炭火を盛り、一把の香を携へて大祭司は至聖所に入るのである（ヘブル九の七、十一、二十四—二十六參照）。大祭司が炭火中に香を投ずるに、香の煙は『契約の櫃』と『惠の座』を蔽ひ、恰かも神の御前を遮るやうに見える（レビ記十六の十三參照）。それは何人も神の御姿を見ては生きることを得ないからである（出エジプト十九の二十一、士師十三の二十二）。然る後、贖の血を『惠の座』の東側ミ、其の前の空地に七度灑ぐのである。斯くて至聖所から出て來た大祭司は自己と其の家族のために贖罪を終つて、次に民

衆の罪祭を行ふためにヤアウエ（神と言ふと同じ）に對して定められた山羊を供物として民衆の贖罪を行ふ。然る後再び至聖所に唯だ一人で進んで山羊の血を前と同様な方法で灑ぐのである。此所に出エジプト記はレビ記に見えない細目を掲げてゐる。此れを終りて大祭司は再び至聖所を出で、燔祭の祭壇上で淨めの儀式を行つた後、アザセルに獻げると定めた山羊に奇妙な儀式を行ふ。此の山羊を『遁れの山羊』と稱する。即ち大祭司は兩手を山羊の上に置き、イスラエルの凡ての罪を告白する。それから其の山羊を荒野の遠い地點に伴つて之を解き放たしめるのである。大祭司は之を終つてから再び水に浴して『集會の幕屋』に入つて祭司服を着し、出て來て自己と民衆のために二つの燔祭を獻げる（レビ記十六の二十三以下）。同時にアザセルに山羊を獻げることを命ぜられた使者は、穢れてゐるものとして沐浴せしめられる。後年に至つて罪の悔改的告白は『贖罪の日』の重要な儀式とせられるに至つた（詩二十二の五参照）。之に就いて更に詳細な規定はミシュナの小冊子ヨオマアから其の主要點を抜いた『贖罪の日』の中に掲げられてゐる。以上の儀典は我が即位禮の次第書を読む心地がせられる。本講に至大の關係を有するのは此の祭日である。こゝを讀者は註解の部で既に認められたであらう。

第二に以上の他の幽囚後の祭典や聖日を略叙すれば次の通りである。

『喇叭の祭』宗教年度の第七月（チスリイ）、政治年度の第一月の始めに行はれる。故にそれは新年祭で、嚴肅な安息日、新月の祭で、業務を休んだ、其の供物の規定は民數紀二十九の一―六を見て戴きたい。

『宮潔の祭』（今も尙ほユダヤ人はハナツカアと稱して之を守る）。此れは紀元前百六十四年、ユダ・マカビイがアンテオカス・エビファネスの爲に異教の犠牲を獻げて穢された神殿を聖別するため創設した祭日で、キスレウの月（十二月頃）に之を守つた。詩の第二十篇は此の事件に當るもので『神殿獻堂の詩』である。こゝ一般に認められてゐる。而して今も尙ほユダヤ人の禮拜式に用ひられてゐる（ヨハネ十の二十二参照）。

『プリムの祭』。アダル（二月―三月）の十四日、十五日に守る。ハマンの手からユダヤ人の救はれた記念の祭である。エステル九の二十二には『この兩の日にユダヤ人、その敵に勝ちて休みこの月は彼らの爲に憂愁より喜樂にかはり、悲哀より吉日にかはりたれば是らの日に酒宴をなして喜び、互に物をやりこりし、貧しき者に施與をなすべし』と命じてゐる。マカビイ書（典外聖書）には『モルデカイの日』と此の祭を稱してゐる。ヨセフスに據れば此れは紀元第一世紀に創立せられたものであると言ふ。

『アクラの祭』。第二月即ちイヴァルの月(四月―五月)の二十三日に當り、アクラの占領を聖別を記念する日で、紀元前百四十一年シモン・マカビイの創設した祭である。此の祭は後年頽れた。

『薪木運搬の祭』。アブの月(七月―八月)十五日に守る。神殿の祭壇に火を焚く薪を搬入する日である(ネヘミヤ十の三十四、十三の三十一)。

『ニカノルの祭』。マカビイ家の創設したもので紀元前百六十一年ベテレヘムの近郊アダサで、アントオカス・エビファネスの下にスリヤ軍の大將であつたニカノルを敗つた記念日である。アダルの月(二月―三月)十三日に守る。

『エステル断食日』。エステル四の十六。アダルの月十三日、即ちブリムの祭の前日に當る。

以上に述べた他、『悲哀慟哭の断食日』が屢々行はれた。即ちタムムズの月(六月―七月)の九日ユダ王國の末期に起つたバビロン軍がエルサレムに侵入した悲劇の日の記念日(列王紀下二十五の三以下、ゼカリヤ七の三、五、八の十九)、アブの月(七月―八月)十日、聖都と神殿の滅亡の記念日(エレミヤ五十二の十二)等である。

次に宗教年度に従つて配列した主要の祭日や断食日を略記することとする。

一、アビブ即ちニサンの月(三月―四月)

一日、即ち新月祭 宗教年度の元日。

十四日、過越祭の準備の日 過越の羔を日没頃に食す。大麥の收穫祭。

十五日、安息日又聖集會日 種無しパンの週間第一日。

十六日、オメル供日即ち初穂の供物(大麥)。

二十一日、聖集會日。

二、イヴァルの月(四月―五月)或はチフの月(舊名)

一日、新月祭 十四日、第二の過越祭又は小過越祭と言ふ。

三、シヴァンの月(五月―六月)

一日、新月祭 小麥の收穫祭。

六日、七日、ペンテコステ即ち七週の祭。此の日は穀物收穫祭の最終日。

四、タムムズの月(六月―七月)

一日、新月祭。

五、アブの月(七月―八月)

一日、新月祭。

ユダヤの祭日及び儀典

- 六、エルルの月（八月―九月）  
一日、新月祭。
- 七、チスリイの月（九月―十月）又エタニムの月（舊名）  
一日、新月祭 ユダヤ政治年度の始、喇叭の祭。  
十日、贖罪の日。  
十五日―二十二日 假小屋の祭（即ち構蘆祭）。
- 八、マルケスヴァンの月（十月―十一月）又ブルの月（舊名）  
一日、新月祭。
- 九、キスレウの月（十一月―十二月）  
一日、新月祭。  
二十五日、宮潔祭。
- 十、テベスの月（十二月―一月）  
一日、新月祭。
- 十一、セバトの月（一月―二月）

- 一日、新月祭。
- 十二、アダルの月（二月―三月）  
一日、新月祭。
- 十三日、ニカノルの祭。
- 十四日―十五日、プリムの祭。
- 十三、ヴェ・アダルの月（閏年の月）。

註、以上は太陰曆即ち日本の『舊曆』である。日本でも明治二十年前後までは舊曆の一日即ち新月を朔日と稱して祝った。

『誓願』は他の國民の間に屢々見るやうにユダヤ人の間には往々行はれた。危急の場合に、困窮の場合に神の援護を求めやうとして任意に守つたもので、何物かを供へて神に誓を立てた。其の神への供へは努力のこともあり。品物を献げることもあり、又犠牲を献げることもあり。それは甚だ嚴重な義務を生ずる行事で、其の結果はエファタのやうな悲劇の場合（士師十一の三十以下）もあり、又其の結果の全く豫想を裏切る場合もあつた（使徒行傳二十三の二十一以下）。其の誓願を立てた以上は回避や遁辭は斷じて許されず、之を犯せば罪ありとせられた（申命記二十三の二十一―二

十三、マラキ一の十四)。レビ記二十七の一―二十九に誓願の成就と其の贖はれるべき條件に由つてヤアウエに献ぐべき犠牲或は供へる物件に就いて規定してゐる。又民數紀三十の一―終には婦人〓既婚者、離婚者、寡婦〓の如何に拘はらずの行ふ誓願を規定し、又當時の婦人の従順な有様を最も明白に示す一例となるのであるが、夫の承認又は許可なく婦人が誓願を立てることを禁じてゐる。『ナザレ人』は元來カナン人の放縱淫逸の風がイスラエルに侵入して來たのに反抗して起つた團體で(民數紀第六章、士師十三の四以下、エレミヤ第三十五章、アモス二の十二)あるが、其の昔のイスラエル民の遊牧時代の單純生活に還らんと努力したものである。従つて其の誓約はヤアウエに對して己を聖別し、又世に隔絶することを目的とした。禁足に葡萄酒を絶つこころが其の主要な義務で、殊に葡萄からの製品を絶つこころは民數紀第六章に規定し、又設令近親であつても死者の屍體に觸れるこころを禁ぜられた。

以上ユダヤ人の祭日、儀典に就いて大様を述べたが、更に新約全書、殊に四福音書の研究には重大な意義に關係を有する安息日に就いて一言して置くこころが讀者に便宜であるこころ信ずる。

『安息日』。ユダヤ人の間には古くから月の新月日(即ち朔日)に十四日乃至十五日即ち満月日とを安息日を守る事となつてゐたものと思はれる。ニサンの月の十四日と十五日の間に贖罪の羔を食

ふのもそれが爲である。新月日に安息日とユダヤの預言書のうちに示されてゐるので明かである(イザヤ一の十三、ホゼヤ二の十一、アモス八の五)。同時に第七日の安息日も亦並用せられてゐたもので、七言ふ數は神聖なものに考へられた。日本でも子供の誕生を祝ふのに、七日七日を以て計算し、其の七回目を特に祝ひ、佛事でも初七日、二七日、三七日と言ふやうに營み、七の七回目を四十九日と稱して其の供養の一段落としてゐる。此の安息日は新月日より屢々廻つて來るので、更に重要な日として守られることとなつたであらう。それは誠命のうちに示された唯一の聖い日(出エジプト二十の八―十一)、レビ記第二十三章に示される祭日表中で第一に掲げられてゐる。昔から此の日に勞働は禁ぜられ、收穫期、耕作期でもそれを犯すことは出来なかつた(出エジプト記三十四の二十一)、幽囚後にはそれが一層嚴重に取締られるこころとなつた。安息日に木片を集取したと言ふので、死刑の宣告を受けて石で撃ち殺されたものさへあつた。

七日に一回の安息日は安息循環の基礎となつた。従つてそれを年に當て嵌めて、七年目を第七年即ち『安息の年』と稱し、若し奴隸が之を希望するならば家畜や麥粉や葡萄搾機を與へて之を解放しなければならなかつた(出エジプト記二十一の二―六、二十三の十以下)。又其の年に貸金の取立てを禁ぜられ、土地は手入れをせず其のまゝに置かれた(葡萄園でもオリブ園でも同様)。同様に



月には第七月があつた。七月はこれがために特に聖別せられ、レビ記二十三の二十四以下の規定に従つて其の第一日には喇叭を吹奏し、燔祭を献けた。

七年の第七回目は其の循環の終りで、此の最後の年を『第五十年』と稱した。レビ記二十五の八―五十五に其の細目を掲げてゐる。それはチスリイの月（七月）の十日で喇叭が高く吹奏されて告示せられた。土地の手入は『第七年』と同様に禁ぜられ、賣買も亦其の年を越えることを禁ぜられた。『地を賣るには限りなく（註、無期限の意味）賣るべからず、地は我の有なればなり。汝らは客旅また寄寓者にして我こそもに在るなり』〔二十五の二十三〕とある。

以上各祭日、儀典及び安息日に就いて略叙したが、其の祭典の次第や規定の細目は引照した舊約聖書の項下を見られ、ば明かである。然し安息日に關するものの如きは聖書の明細な指定に更に各時代のラビの註解乃至附則が加へられ、甚だしく面倒のものとなり、其の精神は失はれて形骸のみが重んぜられ、従つて最も寛宏慈惠の社會政策として授けられたものが却つて民衆に束縛と苦悶とを與へる因となつた。耶穌が憤然として其の傳統を攻撃せられるのは此れがためであつた。

（此の項、主として、オウ・シイ・ハワイハウス博士の論文に據る）

ユダヤの祭日及び儀典（終）

録附  
(2) ユダヤの歴史

## ユダヤの歴史

本書翰はヘブル人の歴史を少なからざる交渉があることは其の性質上申すまでもない。従つて此れを理解するには舊約時代、聖書に漏れてゐる新舊全書の中間時代の大概を心得てゐなければならぬ。詳細は勿論歴史の参考書に據らるべきであるが、唯だ本文を理解し得るだけの範圍の参考にも思ふので、此所に適當な餘白を得たのを幸、其の約三千年の歴史を極めて簡略に叙述することにこころする。勿論此れは本講のみを考へたものではなく、註解の諸所に引用せられるユダヤ歴史が讀者に鮮やかになればこそ冀ふのである。

餘白に限りがあるので其の案配に心を用ひねばならない所から、此の目的と同様な必要から頗る手際よく纏められてゐるダムメロウの編輯を大様襲用することにこころした。尙ほ聖書字典、基督傳の二三をも参考した所がある。

### ヘブル民族の起源

ユダヤ人即ちヘブル民族は人類の人類別から言ふとセム族に屬する。其の起源はアラビヤに相違

はない。此の種族は西北部の亞細亞に移つて殖民したが、メソポタミヤ即ちチグリス河ミユウフ  
ラト河の中間が一番多かつた。其の最も古い記録に由るに紀元前四五千年に既に文化に於  
て、宗教的信仰と道德とに於て、甚だしく進歩した民族があつた。紀元前二千四百年頃にバビロニ  
ヤの主權者たちは此の地方の大部分を支配してゐたが、其のうちでハムラビ王家を創立した人々が  
最も有力なものであつた。近來の研究で其のハムラビはアムラベル（創十四の一）の事であること  
一般に認めらるゝやうになつた所から推してアブラハムの當時の年代を約紀元前二千五百年と算定す  
ることを得る。或る學者はハムラビ時代を紀元前千九百年とするのであるが、先づ此の五書の時代  
を紀元前二千年の始めに置くことが無難であらうか。

此の歴史上の論點に就いてアブラハムの物語は創世記第十二章より第二十五章を引用せねばなら  
ぬ。其の記事からアブラハムがイスラエル民族の特殊の宗教の創立者であると言ふことは確かに認  
めねばならないのであるが、彼が果して當時の周圍の宗教から感化を受けたものであるかどうかは  
非常に興味のある問題である。彼の起る前に世界に斯くの如き純潔な宗教を産み出す傾向があつた  
であらうか。

此の時代の記録に由ると皆何れも宗教が其の中心となつてゐるのであつて、宗教は知識の源泉で

其の祭司は思想上には何れの方面に於ても指導者となつてゐた。其の宗教も原始の状態は千態萬様  
到底之を識別することは出来ぬ。天空の神々、地上の神々、水中の神々、神々の家族、父神や母神  
や子神や、市を司る神々、山の神々、方角の神々等凡そ今日我等が遭遇する自然力は悉く神々であ  
つた。八百萬も營ならぬ神々があつて、皆迷信を伴ふものであつた。然しそれを少し深く研究する  
と其の中にも高い思想を含んでゐないこともないのである。此の地方の住民には我等には到底想像  
も及ばないほど天空を睨み詰める癖があつてバビロンの思想家たちは天體の運行を研究し、其處に  
神々の玉座を認めたものであつた。此の人たちの意見に由るに宇宙は三つの部門に分れてゐて、第  
一は北極星が不斷に燃えてゐる北部の天體、第二は天空を廻轉する黃道の廣い帶で、太陽、月、遊  
星の運動は皆其のうちに籠められ、第三は南方の深淵であつた。其の三部門には各主神があつて之  
を司つた。即ちアヌ、ベル、エア、此れが其の三大主神であつた。同様に黃道帶が又三つに區別せ  
られ、月ミ日ミヴキナス即ち宵の明星が之を支配してゐた。斯くしてどの點から見ても總ての現象  
を其の顯現ミ見做すべき獨一崇高の神の觀念が、どうしても起らねばならないやうに見えた。例令  
ば月の神シンには高雅な讚美が献けられた。

『主よ、天ミ地ミ律法の支配者よ 其の詔は破る可らず』

天に於て誰か最も大なる？ 汝のみ獨り唯だ汝のみ最も大なり！  
地に於て誰か最も大なる？ 汝のみ獨り唯だ汝のみ最も大なり』云

是れと同様に地方の神々は有力なバビロニヤのマルダックの神に併呑せられて了つた。而して今一步の所で新たな默示が授けられる所まで進んで來た。然し其の一步が中々に踏み越えられなかつたものである。バビロニヤ人の一番進歩した思想でも神々は特殊の品性を具へた活ける人格と言ふよりも寧ろ之を抽象したものであつた。例令ば我が國の昔の武士の家で麻利支天を武勇の神、即ち勇氣の權化として祭り、又沈着の權化として不動明王を崇めたやうなものであつた。(編者は此處で以上の神や佛の宗教的研究の意味でいふのではない。其の風習と禮拜者の考だけでいふのである)。アブラハムの物語は此様な世態の間に挿まれてゐるのである。斯くの如き思想觀念が盛に流行してゐる只中にあつて、アブラハムは自分の良心に情熱に深遠な御聲を認めて一人格である神に實際の交渉を行ふことが出來たのであつた。而して此の發見した神と只管に交際せんがために、彼は故郷を離れ、同族を棄て、カナン國へと漂浪の旅に出た。メルキゼデクと言ふ不思議な人物も同様な信仰を有してゐた所を見るに、他にも此の種の人物があつたらしいのである。然し自己のみならず、後繼者に其の信仰を傳ふることを得たのはアブラハムのみであつた。彼は宗教は神の人格的交際

にあることを悟つたものである。勿論其の一神教の程度に彼を伴つた信仰がどの程度のものであつたか、其の道德的觀念がどの程度まで進んでゐたかと言ふやうなことを此處で論じてゐるのではない、然し、聖書の物語に在る程度まで彼が進んだものとするならば、彼は實に『信仰の祖先』であつた。然し神の默示が其の後他の系統に頼らず、彼の子孫を特に選んで授けられたことを怪しむことが出來ぬ。天の父は常に『靈に眞を以て拜するものを求め』、必ず其の音信を理解する人物を發見せられるのである。

### イスラエルとエジプト

暫くの時代、ヘブル民族は遊牧の民としてヘブロンとベエルシバとの間の沃野に住んでゐたものであらう。此地方は後にネゲブ又はユダの南の國と稱せられた所である。此處からエジプトの境にあるゴセンの野に移つた。當時エジプトはヒイクソオス即ち牧羊王が支配してゐたものらしく、彼等も祖先はセミ族で紀元前十六世紀まで續いた王國を此處に建設してゐた。ヘブル民族が此處で優遇せられてゐたことは、王族と婚姻を結んでゐたのを見ても明かである。このヒイクソオスが放逐せられて新な王が起つたが、彼は所謂ヨセフを知らなかつた。即ちヘブル民族との交情を心に留め

なかつた。而して彼等を虐待した。今では研究の結果、この壓制な王はピトムに實の倉庫を建築したラムセス二世であつたことが明瞭になつてゐる。

### エジプト逃亡

ヘブル民族のエジプト逃亡を研究した色々な證據に由ると、その年代は紀元前千八百十年以後ではなく、千二百五十年より以前ではないこととなつてゐる。或る人は千二百九十二年から千二百一十五年の間であつたといふ。テル・エル・アマルナ文書版に由るに、この時代まではバレスチナはエジプトの屬地で、其勢力の強大なことは到底ヘブル民族が征服して占領する望はなかつた。後にパロ家の勢力も衰へて、國境外の屬地は到底領有してゐるこゝが出来なくなつた。而してヘブル民族が荒野に彷徨つた時代は、ラムセス三世（千八百十年—千四百四十八年）が王位に在つた頃に相違はない。而してラムセス二世の子メレンプタがヘブル民族逃亡時代のパロであつたことも疑ひはない。

エジプト人の疫病やゴセンからの出發に就いての色々な議論はこの項の目的が歴史であるから省略するが、それでも紅海の横斷は國民の記念として長く存在したこゝをいつて置かねばならぬ。コルニル（獨逸の舊約學者）は『この危急存亡の機會にイスラエル民族は創立された。彼等は決してこの事件を忘れなかつた。このとき彼等は神がその有力の御手を以て彼等を懐き、神の民を救ひ、奴隸の境遇、即ちエジプトから彼等を神自らが導き出し給ふたに信じた。』といつてゐる。

### モーセの宗教上の教義

イスラエル民族はゴセンの野を出て或る年月をシナイ山の麓に送つた。此處でモーセの大事業即ちイスラエル宗教の一大組織は完成したのであつた。各方面から五書を研究した結果は、モーセの指導の下にエホバとイスラエル民族との契約がシナイ山で完うされたといふ證據が夥しく存在するのである。この契約は決してイスラエル民族を統一するための義務になつたのみではなかつた。神が彼等に慈惠を垂れ、彼等をエジプトより導き出し給ふたことを信じて、彼等の父祖の神より自由な道徳上からの選擇を受けた結果に外ならぬに信じた。多くの註釋者が認めてゐるやうに、モーセの十誡はモーセ自身が創定したものであるこゝを否定することは出来ぬ。これに由つてモーセの宗教を略叙するこゝの項目となるであらう。

一、モーセはイスラエル民族の祖先に對し黙示を授け、尙ほ彼等にもその御意を知らしめ給ふ人

格的の神を信じた。この神は御名をエホバと稱し、イスラエル民族との關係は血統や外形的の必要からではなく、神と彼等との間柄に就いて神自身の選擇に由るものであつた。故にイスラエルは神の選びを受けてエホバの民となつた。他の國民は各自の神々を未だ曾て斯くの如き關係を結んでゐる事。

二、彼はその根柢的な屬性が正義と慈愛である神を信じた。この神の全能は、エジプトの堂々たる權勢を物の數にもしないほど有力で、而もこれは暴虐ではなく、道德的意義に實施せらるゝ事。

三、この神はその民と契約を結び、その民は人と人との間に正義の行爲、公平にして兄弟の至誠を盡さねばならないことを要求せらるゝが故に、人に對しては宗教と道德と離る可らざる關係を保つべきを命ぜらるゝ、彼は教へた。

モーセの時代並にその後久しくイスラエルの宗教は、一國民の宗教として維持せられてゐたけれども、この教義には既に世界の宗教たるべき素質が含まれてゐるのである。彼の偉大な根本精神は往々棄て去られ、偶像教からの感化の下に腐敗したこともあつたけれども、尙ほそれでもカナンの感化を防ぐのみならず、その國土から國民をさへ驅逐するに至つた。彼の教義の勝利は即ち彼の主張が公平であつて、彼が神の特に選定せられた人物であつた證據であるといはねばならぬ。

### カナンの征服

荒野に彷徨時代の年月を彼等は多くエジプト人の勢力の及ばない、南の方の沙漠カデシバルネヤで送つた。然るにその頃色々な事件が起つて、彼等がカナンに討入る時節が到來した。多くの種族が聯合し、尙ほそのうちに西部から來た海賊團ペリシテ人がパレスチナに攻込んで來た。ラムセス三世は大遠征を企て、エジプトの勢力を復興したけれどもこれが最後で、それから數百年起つてこの出來ないほどエジプトの國運は衰へて來た。斯くてエジプトはスリヤを失つたが、スリヤには多くの獨立の都市が起つた。此處に於て『約束の地』に赴く門戸は開かれて來た。第一の行軍はヨルダンの東部にあるアモリ人の國で、ヘシボンを首府とした王國であつた。その國王シホンは戰敗れて殺され、領地はイスラエル民族が奪略した。モーセは此處で死んで、ヨシユアがその後を繼ぎ、ヨルダン河を渡つてエリコを攻め、之を陥れて始めて所謂蜜滴り乳流るゝ約束の地に足溜が出來た。ヨシユアが死んでから後、尙ほこの國內に於ける残つた土地はイスラエル民族中の別々の種族に由つて奪略せらるゝことになつた。即ちユダ、メシオン、ヨセフ、ゼブルン、アセル、ナフタリ、ダン等が各戰つて各地を取つた。その結果海濱のビニケ、ペリシテの獨立市は之を滅すことが

出来なかつた。而してタアナク、メギドン、ベテシヤン等の堅固な要塞に由つてキシオンの谷や、内部の豊饒な平原は防禦せられ、アヤロン、エブス、ゲセルの城の爲めに、ユダミシメオンの兩種屬は他のイスラエル民族との中間を遮られた。近來に至つてバレスチナの發掘が盛に行はれ、その結果は以上の聖書の記事が全く事實であることが證明せられた。

### 士師の時代

この時代はエジプト脱出後二百年に滿たず、紀元前千〇五十年頃に及んだものと思はれる。女預言者デボラ、バラク又英雄ギデオン等に由つて國はやうやう危きを免れて、尙ほエホバに對する信仰を維持してゐた。然しその征服した國々の宗教は、自らイスラエル民族に大いなる感化を與へ、從來地方の神々のために諸所の高所に設けられた祭壇は、エホバの禮拜に採用せらるゝこととなつた。預言者の書に由つて後世甚だしく攻撃せられるイスラエル宗教の墮落は既にこの時に兆してゐるのであつた。士師記五章のデボラの歌はこの時代のもの、今は一般に認められてゐる。これを讀めばイスラエル民族の一致團結の精神ミエホバに對する眞の信仰ミを明かに證明するに足るのである。この時代はペリシテ人の壓迫を受けて狼狽の間に終つてゐる。この大膽な好戰種族は我が國の昔の歴史に聞く蒙古勢に好く似て戰術に掛けてはイスラエル民族に遙かに優れてゐた。彼等は如何にもしてイスラエル民族を屈伏せしめねば止まない考を有つてゐた。シヤムガル(十三の三)やサムソン(同十三の以下)などの豪傑が、一騎打ちでは夥しい掠奪團を撲殺してゐるけれども、隊伍を組んだ戰爭では到底勝つ見込みはなかつた。ミズバの近方アベクに於てエホバの契約の櫃を奪はれ(母前四章)てからは、この國民の運命は盡きたものと思はれた。ペリシテ人の領地はイスラエル中央から南部全體に及び、その本營はベニヤミンのギベアに設けられ、イスラエル民族はその武器を使用するこゝを禁ぜられるに至つた。

### サムエル及び王國の建設

この國家危急存亡の時に當つて一面には預言者の首座の人物ミして、一面には王國の設立者ミして、二重の名譽を擔ふべき一人物が起つた。即ちサムエルであつた。その生涯は誕生からその偉業に至るまで終始一貫してゐる。彼等の成功は一つの源から出てる。この國家衰頹の日にあつて、雜然たる種族を打つて一團ミし、その敵に當るには國王を定むるこゝが必要であるミ彼は見て取つた。彼はこの愛國の企てを全うするにエホバに熱心に事ふる預言者の團體を全國に巡視せしめて人

物を求めしめた。これは勿論理想的な手段ではなかつたけれども(母前八章)然しこの場合にあつては賢明な施設であつたといはねばならぬ。ベニヤミン族の一人で勇氣絶倫のサウルといふ人物がその選に當つた。アンモニ人を破つて奪ひ取つたヤベシ、ギルガルに於て勝利の大宴會は催され、其處でサウルは全民族を率ゆべき國王の位に即いた(母前十一の十四、十五)。サウルの時代は寸刻の絶間もなくペリシテ人との戦争に費された。彼は東部から起つてユダの高地を占領し、パレスチナの中央に進んだ(母前十四章、十七章)。サウルの晩年はダビデとの争に疲れ、その明かであつた頭腦も幽鬱症のために暗く、エズレルの平原にあるギルボア山の麓に於てペリシテ人との戦で討死した。斯くてペリシテ人はイスラエルの中央に侵入して來たのであつた。この戦争は紀元前千〇十七年頃の事であつた。

### ダビデ位に即く

ダビデがヘブロンにあつてユダの王となつた後、七箇年を経てヨルダンの對岸マハナイムを中心としてその四方を治めてゐたサウルの子イシボセテは、その家臣のために殺されたのでヘブル民族全體がダビデを王にするに至つた(母後五の一—三)。ダビデの時代に於て最も著しい事はペリシテ人を全く征服したこゝであつて、これから後にペリシテ人の行動は歴史に跡を見るこゝが稀になつた。尙ほ周圍の民族を斬り靡けて、爰に始めてイスラエル帝國の基は据ゑられた。而してエルサレムの占領と同時に此處にエホバの契約の櫃を遷した。當時アツスリヤは甚だ微弱であつたし、ヘテの北方帝國は消滅し、エジプトは分裂して勢力衰へたため、ダビデはソロモンの下にイスラエルが迅速な發達を遂げたこゝはいふまでもない。

### ソロモン

ソロモンの偉業は神殿の造營と商業の甚だしき繁昌を來らしめたこゝであつた。然し彼が東洋諸國の國王の如くイスラエルの自由民を取扱つてその數が漸次に減じたこゝが國民の不平の種となつた。而してその死と共に帝國が瓦解した主なる原因はこの不満であつた(王上四の二十一—二十八、五の十三、十一の二十四等)。

### 王國當初の宗教事情

以上の時代に於ける宗教の事情は其處此處に散在する資料で推測が出来るのである。中央を神聖



なものをこして總ての燔祭をエルサレムに集注する嚴重な律法は定まつてゐなかつた。サムエルはミヅバで燔祭を献げ（母前七の九）ラマにも祭壇を築き（七の十七）その他の丘上でも燔祭を行ひ（九の十二）ギルガルに於て（十一の十五）又ベツレヘムに於ても之を献けてゐる。同じくサムエル前書第十四章三十五節にはサウルが忠誠の實を表はすためにエホバに献ぐる祭壇を幾個所にも築いたこあり、同第二十章六節にはベツレヘムに於てエツサイの年祭の行はれるのを甚だ自然の事のやうに記される。同時にナタンの如き預言者が多くゐて、エホバの要求せられる通りの道德的品性を具へ、極度の尊敬を拂はれてゐた。（母後十二の一―十五）。ダビデ王國の建設に共にエホバの天壤無窮の王國の建設に希望を生じて爾後の預言者の文書にはその大部分を占むるに至つた（母後七の十一）。

### 王國の分裂

紀元前九百三十七年頃、ソロモンの死去と共に王國は分裂したが、ユダは小さく弱く、エジプト王シシャクの侵入のために一層その力が衰へた。エフライム人がエジプト王に貢物を献けた事實があるに徴すれば、イスラエルもユダも共にエジプトの屬地になつたこは想像が出来る。然し北方イス

ラエルに對して戦争を行つたこいふやうな記録は發見せられない。當時暫くの間は二つの王國は戦争を事しイスラエルの方が優勢であつた。ユダの王アサが紀元前九百年にスリヤの王ベンハダデに援兵を求めてバアシヤを攻めたのは實に禍の基であつた（王上十五の十八―二十一）。彼の行爲が不覺であつたこはスリヤ王の軍がイスラエル國境に始めて侵入して來る結果となつたので明かである（代下十六の七―九）。革命が幾度か行はれて後、紀元前八百八十六年オムリ王が王位を恢復してサマリヤに都を建てた（王上十六の二十三―二十六）。その王の手腕に由つて平和が結ばれてイスラエル王家ミユダ王家は結婚政策で聯盟するこもなつた。メサの記録を止めてゐるモアブの石碑にはオムリがモアブ人を征服したこあるが、アツスリヤの記念碑は更に彼を以てイスラエル王國の建設者として記してゐる。この赫々たる偉業に就いて聖書は一言半句も載せてゐないのを見てもヘブルの著述家が純然たる興味より外には意味のないこに如何に冷淡であるかを證して餘りあるものである。

### エホバかバアルか

オムリ王の子アハブが位に即いたこきに、預言者エリヤミバアルの神官との間に一大論争が行は

れた。國家政策の爲めにヤラベアム王はベテルとダンに黄金で造つた犢の形をエホバの像として安置した。故に北方王國の國教はエホバの宗教の墮落した形式であつた。記録によるエリヤがこのエホバの犢の像を禮拜することに就いて一言も言つてゐないので、彼が之に對して少しの反對をも表してゐなかつたを論ずるものがあるけれども、是れは少しく當を得ないやうである。イスラエル人の高等な人々の良心は、偶像の如何なる形でも之に禮拜を獻ぐることに反對してゐる。北方イスラエルに於てすら尙ほ純然エホバを禮拜するための祭壇は築かれてゐたに相違なく、エリヤの王上第十九章十節に於ける憤慨と、王上第十八章三十節の彼の行爲を参照されたい。ピニケ出身のアハブの王妃イゼベルはシドンの王女であつたがツロ人の偶像バアルを輸入して、エホバの後繼者たちに迫害を加へた(王上十六の三十一—三十三、十八の四)。そこでエリヤはエホバの選手として現れて來た。爰に至つてはエホバの宗教が正統か異端かの問題どころではなかつた。エホバかバアルかの爭奪戦であつた。此が寸毫も假借する所なくエリヤが勝利のホオム・ベエス奪取に突撃した理由であつて(王上十八の四十)その革命は後繼者エリシヤによつて完成せられ、オムリ家は倒れてエヒウ(王下九章)の即位になつたのであつた。

### スリヤとの戦端

宗教上斯くの如き争闘が行はれてゐる一方にスリヤとの戦争は長く續いてゐた。それはその源をバアシヤ時代に發した侵略の續きであつた。イスラエルではその間の諸王は遂に臣下の禮を取らねばならない有様とまでなつたやうである(王上二十〇三)。斯くしてアハブに加擔したスリア王ベネハダデは紀元前八百五十四年、二千の戦車と一萬の兵を出してアツスリヤ王シャルマネセル二世と戦つて、ハマテの近郊カルカルに於て敗北したことが記念碑に残つてゐる。その後アハブはスリヤ王國に獨立を宣言し、幾度も勝利を得た(王上二十章)。當時スリヤは紀元前八百五十年、八百四十九年、八百四十六年の三回にアツスリヤとの戦争によつてダマスコを奪はれてから勢力が大いに衰へて、紀元前八百四十二年エヒウはシャルマネセル王に貢を納むることになり、八百三十九年にはダマスコの王ハザエルの爲めに敗られた。當時アツスリヤに叛亂起り、シャルマネセル王の子が之を率ゐて國王を攻めたために、シャルマネセル王は北方バビロンに落ちねばならなくなつた。斯くてスリヤが再び勢を得てイスラエル王國全土に勢力を振ふこととなつた。従つてイスラエルは間斷なく侵入を受け、その國民は多く之に斃れ、極度に人口を減するに至つた。アツスリヤ王ラマン

ニラリの下にダマスコは再度の掠奪を受けたが、ヨアシ及びヤラベヤム二世によつて之を奪還し、その他奪略せられた土地は悉く回収することが出来た。それは紀元前八百十二年から七百八十三年の間の出来事である（王下十三章）。斯くの如き大勝利の間に憂國の志士エリシヤが大いに活動してゐる（王下十三の十四—二十）ヤラベヤム二世（七百八十二年—七百四十一年）の時代に至つてイスラエルはソロモン王以來曾て見ざる隆盛の域に達した。

スリヤミモアブミ戦はんがためにイスラエルと聯盟した南方王國の王位は一時アタリヤのために横領せられて中絶したけれども、嫡系エホヤダが之を奪ひ返した。アマジャ王に至つてイスラエルの聯盟を絶つたため、イスラエル王ヨアシのために惨めに敗られた。然しウジャ王（七百九十年—七百四十九年）に至つてその地位を恢復し、ペリシテを敗り、軍隊を改設し、國境に塔を築き、南方荒野の盜賊團に備へた（以上代下二十六章参照）。

### イスラエルの衰頹

北方王國はヤラベヤム二世の死亡と共に槿花一擲の榮は跡方もなく散り失せた。絶間なく革命が繰返されたためにイスラエルの勢力は次第に衰へ（王下十五の十一—十四）同時にアツスリヤ王テ

グラテ・ビルセル三世（聖書にはブルミある）の侵略的政策に乗ぜられて、イスラエル王メナヘムは之に家臣として事へねばならなくなつた。七百三十四年から三年にイスラエルのペカ王はスリヤのレヂン王と同盟してユダを攻め、アツスリヤに對する敵として同じく聯盟せんことを強ひた（王下十五の三十七、十六の五、賽七章）。ユダはアツスリヤの干涉の爲めに難を免れた。ペカ王はその臣ホセアのために殺され、アツスリヤ王テグラテ・ピレセルは潜王ホセアを承認したが（記念碑に據る）、ホセアがエジプトと祕かに結んだので、忽ちにアツスリヤ王のために捕へられて獄に投ぜられた。更にアツスリヤ王シヤルマネセル第四世はイスラエルに進軍したけれども、サマリヤの陣中で死んだのでサルゴンが代つて之を攻め、紀元前七百二十二年サマリヤは降伏し、北方王國は爰に全く滅亡した。

### 預言者の教訓

アモスミホセアが獅子吼して赫々たる光明を掲げたのはこの時代の事であつた。ヤラベヤムの時代に現れたアモスは獨りイスラエル國內のみならず、その周圍の諸國に對してもエホバの御意を傳へ、その道徳的改革を驚くべき勢で主張した。又ベテルに於ける偶像禮拜を辛辣に攻撃して國民

の滅亡近きにあるを宣言した。彼の唯一の希望は、峻厳な懲めの後にやがて將來ダビデの如き國王の下に王國が恢復せらるべきことを待つにあつた。

ホセアの事業はヤラベヤムの死後、最も悲觀すべき時代に行はれた。國王の悲觀的履歴は彼の教訓に悲觀的調子を帯びるに至つた原因であつたが、彼もアモスの警告と同様な宣言を行つた。彼は犢の禮拜を以て純然たる偶像教であるを主張し、『彼等また其の金銀をもて己がために偶像を造れり』と弾劾した。ホセアの極力主張した所は、神の義より寧ろ愛であつたために、彼の語調には一層峻烈なものがあつた。而も尙ほ彼の苛酷な主張の蔭には神の國の來るべきを見、その永久滅びざるを信じてゐるのであつた。

この二人の預言者の證言の優秀なことは、他に之を求むべくもない。これは決して革新したものではなく、古來の信仰を復興したものに過ぎなかつた。彼等の教義はモーセの教義の中心點を擱んだものであつた。而も尙ほ彼等が大膽にエホバを以て宇宙の神となし、又堅固不拔の信念を以て過去の如何なる特權も、イスラエルが義の律法即ち眞宗教の廣大深玄な基礎を破るに於ては決して許さる可らざるを宣言した點は彼等の卓見を示して餘りあるものである。エホバの偶像禮拜を攻撃したのはホセアの創意であつた。斷言するこの出來ないのはエリヤの條に述べた通りである。然し

サマリヤの犢を以て『匠人の造れるものにて神に非ず』と彼の喝破した所を見て、彼の胸中には寸毫も活ける神に就いての誤りが宿つてゐないのを知り得べきである。

### アツスリヤ時代のユダ

北方イスラエル王國の滅亡と同時に、ユダ王國はアツスリヤに頼つてその命脈を保つてゐた。イザヤの反對ありしに拘らず、ユダの王アハズはアツスリヤの習慣及び宗教に倣ふに汲々としてゐた。その子ヒゼキヤは（紀元前七百二十年—六百九十二年）國歩艱難の間に王位を繼いだ。當時エジプトに於てエテオピヤの王が漸次に勢力を得て彼の同盟を申込んで來た。預言者イザヤは世俗の政權を棄てて、只管にエホバのみに信賴すべきを勧めたけれども之を用ひず、エテオピヤ王と同盟を結んだ、更に進んで紀元前七百二十年より七百年の間に、バビロンに國を建てたメロダクバラダンと協定を遂げ、又アツスリヤに對してはツロ、シドン、アシケロン、エクロンと聯合し、一方にエジプトからの援助を求めた。然しアツスリヤ王サルゴンの後繼者セナケリブが諸方を撃つて進軍して來たためにこの同盟は破れた。エジプト王はエクロンの近郊エルテケに於て敗軍し同時に同盟國たるヒゼキヤ王は四十六の都市の多くの家臣を失ひ、莫大な償金を拂つて這ふ這ふの態でエルサレ

ムに逃げ歸つた（王下十八の十四—十六）。この邊の聖書の記事は混亂してゐるやうである。記念碑にはセナケリブの敗走したことを少しも言つてゐない。或る學者は、これは記録に残されない別の戦場で起つたことだと言つてゐる。兎も角エルサレムが無事であつたことはいふまでもない。此處を明かにするには、アッスリヤ王はヒゼキヤ王の償金を受取つてから一部の軍隊を本國に歸し、エルサレムの降伏を疑つて、その本營はエジプトの國境に屯してゐたが疫病に苦しめられて、遂に本國に引き上げたミするのが至當であらう。この幸運（紀元前七百一年）はイザヤが豫め宣言した所であつて、彼は神の都エルサレムは奪はれずと言つてゐる（賽三十一の五、三十七の—三十三—三十五）。

### ミカとイザヤの宗教々義

この二人の預言者は、この時代の光明であつた。ミカは田舎者であつたが、激烈に農民社會の罪惡を攻撃してゐる。而してエルサレムの滅亡（三の十二）を預言した。然も彼は神の支配は永久であつて、國民の中心よりダビデの如き國王が起つてこの滅亡した國家を再興すべきを信じてゐた（五の二参照）。

イザヤは繰返して刑罪の降るべきを豫想し、唯殘黨のみが免るるものと思つてゐた（其の子に彼はシャルヤシユブ即ち『殘者は歸る』と命名してゐた。）然も彼はイムマヌエルの預言に一層美はしき王國が出現すべき希望を述べ、四つの名を以て王子降臨の約束を傳へてゐる。即ちその王子は永久の平和と祝福を以て國を治め、『エツサイの株より出たる一つの芽』と稱せられると言つた（一の—十—）。

ヒゼキヤの時代に祭壇を悉く破壊して、エルサレムに禮拜を集中しようとの計畫は一部分行はれたが完成しなかつた（王下十八の四—二十二等）。

### マナセ時代の反動

マナセの時代は長く續いて紀元前六百九十二年から六百四十一年に及んだ。その大部分は國運甚だ盛であつたけれども偶像教は再び勢を盛り返してイザヤの事業は大抵覆へされた（王下二 土の一—十七）。マナセ王は其の晩年バビロンから任命せられてゐるアッスリヤ王に對して謀叛したために其の罪過の償ひとして主權國バビロンに曳かれてアッシユルバニバル王に審問を受けた。

眞信仰が尙ほ残つてゐたことは申命記の諸卷が之を證明するもので、此の時代に編輯されたものに相違なく、ミカ書の最後の二章で之を推測することを得る。

## ヨシアの時代

マナセ王の子アモンは即位後間もなく叛徒のため殺され、家臣の擁護の下にアモン王の子ヨシアが位に陞つた。其の時代は當初から實に艱難を重ねた。スクテヤの遊牧民族が西部亞細亞に侵入して來たのであつて、神の審判の日が世界に降るものとしてゼバニヤが預言した所は此れであつたらう。然し彼等の侵入のためにアツスリヤの勢力が甚だしくそがれたためにユダヤ王國には却つて幸になつて、自然に獨立するに至つた。エレミヤの第一の預言も亦此の時代に屬するものである。紀元前六百二十一年攝理に由つて偶然にも律法の書卷が発見せられ、此れが宗教改革運動には多大の援助となつた。それは申命記であつたここに疑ひはないのである(王下二十二の八其の他)。此の書類に基いて異教徒の風習に做つて高い所に祭壇を築いてエホバを禮拜してゐた儀式は廢せられ、祭壇は破壊し盡され、エルサレムの神殿が禮拜の中心とせらるるに至つた。(王下二十三の四、五)。同時にアツスリヤは昔の盛運も見ざる影なく衰へて僅に餘喘を保つてゐる有様であつたが、ニネベはバビロン軍ミド軍に圍まれ、エジプト王パロネコは世界を併呑せんと欲して北へ北へ進んで來た。ヨシアは其の進軍を遮らうとして戦つたけれども敗北し、メギドンで殺された。此れが紀元前

六百八年であつた(王下二十三の二十九、三十)。ニネベは翌年陥落し、バビロン王ネブカドネザルはエジプト王と戦つてユウフラト河畔のカルケミシユで大勝を得、遂に世界の盟主となつた。此れが紀元前六百五年である。エジプトがバレスチナの主權を握つてゐる短い間にエホアハズ王は位を奪はれ、エホヤキムが王位に即いた(王下二十三の三十一—三十五)。然るに三箇年を経てエホヤキムはバビロンに叛いたために位を奪はれてバビロンに捕はれた(王下二十四の一)。三ヶ月の後に彼の後繼者エコニヤは國民中の青年と共に捕へられ、其の中にエゼキエルもゐた(王下二十四の八十六)。時に紀元前五百九十七年であつた。

此の時代に於ける預言者の宗教はナオムが描いてゐる所であつて、彼は同時にニネベの運命に就いて痛快な歡喜を述べてゐる。尙ほハバククは其の世界の衰頹を預言し、各戰勝者の罪跡を擧げて之を痛撃し、且つ『義しき者は其の信仰に由りて生くべし』と不屈の確信を以て宣言してゐる(二の四)。エレミヤの英雄的な事業も亦此の時代の事であつた。

## エルサレム陥落

ユダの最後の王ゼデキヤはエレミヤの警告を用ひず、バビロンに叛き様々の陰謀を企てたので、

當然の酬を受けねばならなかつた。エレミヤは夙くにエルサレムの滅亡の來るべきを預言し、其の爲めに生命さへ危きに至つた。今やエルサレムは紀元前五百八十八年一月から翌々五百八十六年の七月まで十九箇月の包圍を受けてネブカドネザル王のために其の城を奪はれ遂に破壊せらるるに至り、さしも壯麗を極めた神殿も遂に火を放たれ灰燼に歸したのであつた（王下二十五章）。

エレミヤの高雅な人格は此の衰亡の時代に於ける花であつた。エルサレムの陥落を屢繰返して宣言したに拘らず、聽て此の都は「エホバの座位」なるべき時代のあることを豫想してゐる（三の十七）。彼は一方に「その子孫のうちに榮えてダビデの位に座しユダを治むる人は重ねてなかるべし」ミエホヤキムには宣言したに拘らず、尙ほエホバはダビデの後裔より正義の士を起し給ふべきを信じて望んだ。神の國に對する彼等の希望は其の絶望を超越して餘りがあつた。彼の堂々たる宣言は皆牢獄から發表した所である。バビロン軍隊がエルサレムを圍んでゐる只中にあつて彼は國民中の小なるものより最大のものに至るまで悉く神を知り、赦され、恢復せられて神の恩寵を喜ぶ日に至りて神自ら國民の心に刻まるる新たな契約の行はるべきことを宣言した（三十一の三十一—三十五）。以上の時代の歴史は希望の記事で結ばれてゐる。外形主義を踏み碎いた宗教の概念は個人の靈魂に神との人格的密接な關係に基いてゐるのである。正義の主權者の下にエルサレムに於ける榮光輝く

王國の出現を志す預言者の希望は未だ實現しなかつたけれども、此れを宣言した人々が夢みた以上の深淵な意義で「此の世の國」に非ざる王國の君主が自らの血を以て御璽を捺させられる新たな契約で完うせられることになつた。故に我等は預言者が各種各様の形式や人格に於て描き出した信仰は悉く之を活用せしめ、今日の世界に對する勝利であることを主張せねばならぬ。耶穌は彼等が有した信仰を採用せられ、之に高遠な意義を與へ、之を潔め、其の生涯に死に由つて永遠滅亡すべからざる王國を建設せられた。古へを顧みて我らは凡ての歴史は悉く同一地點に集中し、神の御靈の啓導と鼓舞に訓練とに由つて建設せられるのを見る。前途を望んで我らは尙ほ其の永く待望せられ、喜び迎へられ、陰府の門の妨ぐべからざる王國の完全な建設は今尙ほ前にも勝して確實なことを信ずるのである。

### ペルシヤ時代

紀元前五百三十九年、バビロン帝國はペルシヤ王クロス二世の軍隊の破竹の勢に敵し難ねて遂に倒れた。ユダヤの敬虔な民衆は其の領土の變動に望を抱いて前途に光明を認めた。クロス王の宗教（拜火教）は他の諸宗教に對して敬意を保護することを妨げないものであつた。彼は直ちに有名なユダヤ

人セシバザルをエルサレムに派遣し、彼にユダの俘虜の一團を随伴せしめて、神殿再興の權能を授けた。其の事業はバレスチナ残留のユダヤ人や其の隣國、又サマリヤ人のために著しく妨害せられたけれども五百十五年に兎も角も完成した。それにはハガイ、ゼカリヤの兩預言者、ユダの知事ゼルバベル、大祭司ヨシユアも加はつた。然し神殿に於ける禮拜は到底充分に整頓し、又維持するこゝは至難となつてエルサレムの形勢は一層險惡を來たした。斯くてネヘミヤ、エヅラ（紀元前四百年—四百三十年）の時代に國民の救護がやうやくに完成し、其の生活や宗教が始めて堅固な基礎の上に築かれた。此に於てバビロニヤにゐたユダヤ人の大部分はエルサレムに歸り、其の城壁は修理せられ、神殿は其の禮拜の中心となり、神の律法の下に國家の秩序は恢復した。而して國事はダマスコに駐在するベルシヤの總督の承認した範圍で、大祭司を頭領として、各家系の長たる長老が管掌するこゝとなつた。其の制度の改革はサマリヤ人が之に倣つてモーセの五書を採用しゲリジム山上（ヨハネ四の二十）に神殿を建て、大祭司を置き之に對抗する程に整つた。

後百ヶ年間の歴史は明かでないが、ネヘミヤ、エヅラの改革が尙ほ其の感化力を失はず、大祭司の權威と實力とが漸次に確立したこゝは疑へない所である。其の國民の數は比較的少なく、エルサレムの周圍十哩乃至十五哩に極限されて排外的な生活を營み、其の祖先の信仰と習慣とを維持したものと認められる。

### アレキサンダア大王と其の後繼者

アレキサンダア大王の大勝（紀元前三百三十四年—三百二十三年）はベルシヤ領土の倒潰となつた。グラニカス（前三三四）ミイツサス（前三三三）の連戦連勝に次いでエジプトと東方遠征に由つて亞細亞は既に其の手に歸した。エルサレムは其の領地となつてからは平和であつたやうに思はれる。ヨセフスの歴史に由るに大祭司ユダミ市民の有司とが大王を迎へ、大王は恭敬、愛慕の情を以て彼に接したとあるけれども、それは後年の小説であるに一般に認められる。然し何れにしても大王はユダヤに好感を有し、其の住民中の或者は、大王の布令の下に特殊の權能を與へられて、大王の新たに設けた首府アレキサンドリヤに移住を許され、同地は其の大規模で盛大な殖民地となつた。アレキサンダアと共に西洋の生活様式が深く浸入して、其の征服した國民の思想習慣に沁潤するこゝとなつた。ギリシヤの言語、文學は廣く傳へられ、ギリシヤ都市の配置や構造が一般に採用せられるこゝとなつた。其の始め彼らの所謂ヘレニストの傾向は、エルサレムでは深く忌みきらはれたが、時の移るに共にも到る處に其の跡を留め、時代の思潮に著しい影響を與へた。



紀元前三百二十三年アレキサンダアの死後其の領土は大王配下の諸大將の爭奪の餌となつたが、其の戰國時代が治まつてエジプトミシリヤの兩王國が出現した。パレスチナは其の間に存在して、兩國爭點の中心となり、長く其の勝負の的となつた。然し紀元前三百〇一年イブサスの戰の後、遂にエジプトの手に收められた。

### トレミイ家

エジプトを始めて治めたギリシヤ人の王はトレミイであつたので、其の名を取つて王家の姓とし歴代の王はそれに名を附して區別するこゝこなつた。トレミイ家三代の間はユダヤ人は満足して盛となり、エジプトに殖民地を多く起して、何れの地にも會堂を建設し、其の宗教の儀式を行ふこゝを許された。其の結果はヘレニズムと密接するに至り又合流するこゝこなつた。其の社會的宗教的理由からユダヤの移住民はエルサレムと盛んに往來し、屢大祭のために此の聖都に上つた。従つてギリシヤの傾向を輸入し、其の母國の民衆に感化を與へるこゝこも避け難かつた。舊約聖書七十人譯の始の萌芽が與へられたのは此の時代で、少くも五書の翻譯はトレミイ家二代フキラデファス（紀元前二百八十四年—二百四十七年）の世にエジプトのユダヤ人の手で行はれたものである。

然るに其の平和は遂に破れた。而してトレミイ家第四代フキロバトルのこきにパレスチナの爭奪は再び開始せられた。此の王の優柔不斷のためにシリヤのアンテオカス三世（普通大王と稱する）は好機逸すべからず爲して戰端を開いた。ユダヤ人にとつては幸にもアンテオスカ三世は脆くも敗戦して（前二一七）、暫くは其の計畫を放棄せねばならなかつた。フキロバトルが死んで、其の子エピファネスが幼い身で其の後を繼ぐに及んでシリヤは再び戰を挑み、紀元前百九十八年ヨルダンの水源地に近いパニウムでの決戦に大勝を得た。此所に至つて、エジプトの衰頹と秩序の紊亂に悩んだユダヤ人は領主の變更を歡び、アンテオカスにエルサレムからエジプトの駐屯軍を放逐するこゝこを進言した。

### セリウカス家

シリヤを始めて治めたギリシヤ人の王はアレキサンダア大王の名將の一人セリウカスであつた。其の王統はセリウカス家と稱してゐるが、數代の間はセリウカスカアンテオカスカの名を用ひてゐる。パレスチナを領土に加へたアンテオカス大王は、其の第五代目の王であつた。彼はエジプト時代にユダヤ人が與へられてゐた特權を少しも妨げなかつたのみならず、更に一層の好感を寄せて、彼

らに宗教の自由を許した。然しシリヤの勢力の加はるに従つてユダヤ人の間に不統一を生じ、彼らは未だ曾て経験しなかつた難題に遭遇した。シリヤ人の首府アンテオケはヘレニズムの中心となり、其の交通のため、ユダヤへヘレニズムの主義主張が盛に流れ入る新たな門戸となつた。日ならずしてエルサレムに有力なギリシヤ黨が勃興し、彼らに、國民的理想に尙ほ執着し律法の義を求むる國粹黨との間に激烈な暗闘が行はれるに至つた。アンテオカス大王の死後其の子セリウカス第四代フネロバトル（紀元前百八十七年—百七十五年）が位を繼ぐに及んで愛國黨を壓迫し神殿の掠奪を企てたためにエルサレムの形勢は高調した。其の後繼者アンテオスカ第五代エピファネス（紀元前百七十五年—百六十四年）の時代に事件は最高調に達し、正統派の首領で大祭司たるオニアスはトビアスの一族並に其のヘレニスト派をエルサレムから放逐した。エピファネスはエルサレムに遠征してオニアスを廢し、自己の幕下たるヤソンを第一に、次でメネラウスを大祭司に任じた。オニアスは多くの敬虔な部下を率ゐてエジプトに遁れ、レオノボリスに新たなユダヤ人の神殿を建立した（前一七〇）。エルサレムは兩黨爭奪の的となつたが、エピファネスはエジプトに追撃の軍を進めてゐる間に死んだとの風聞に接して、暴動が起つてメネラウスの徒黨は殺戮せられた。然しエピファネスはエジプトからの歸途、其の暴徒を鎮定するのみならず、其の再起を防ぐ手段を講じた。即ち

残忍極まる刑罰を叛徒に加へたのみならず、神殿に亂入して、其の什器、財寶を略奪し、ギリシヤ宗教の形式に従ひ、禮拜を行はしめ、且つ自己の容貌に肖せたギリシヤの神ゼウスの像を安置せしめ、同時にギリシヤ共和國の雛型に準じて自己の代理官を任命した。其實はユダヤの宗教に眞から惡意を有した爲めではなく、叛逆や反感を根絶する積りで、ユダヤの習慣を墨守し、異教の神に犠牲を献げることを拒んだ民衆には拷問や死刑を課した。

此所に至つてユダヤの歴史は其の最も崇高な時代を出現した。即ち舊來の愛國黨は今其の主義のために喜んで死に即き、後年の殉教者の模範となつたハシデキム即ち『宗教者團』が勃興するこゝまなつた。彼らのうちには或は地方の荒野に隠れたもので發見されても、其の日が安息日ならば、其の日を穢して遁けるより寧ろ喜んで殺されるものもあつた。彼らの態度は迫害者に對して如何なる残忍苛酷な取扱にも甘じて服従しつゝ、其の主義に殉ずるにあつた。然し人間の忍耐にも限りがある。遂に彼らも窮鼠猫を食む勇氣を振つて自由のために奮闘するに至つた。第一に旗を擧げたものは昔からの地方の祭司で、ハシモン家の家長たるマッタシアスでベテ・ホロンミルダの中間モデンに兵を起した。彼は異教の犠牲を献げるユダヤ人を見て憤慨措く能はず、之を斬殺し、同時に彼の傍にゐたシリヤの役人アピレスをも誅戮した。斯くて其の五人の子と共に砂漠に遁れ、有志を募つ

て謀叛を起した。

## マカビイ家

紀元前百六十六年、マツタシアスが死んで後、マカビイアス、即ち『鐵槌』を稱せられる其の子ユダが起つて指揮に當り、ベテ・ホロン、エマオス、ベス・ザル等に轉戦連勝してユダの國境からシリヤ人を放逐し、エルサレムの城塞の守備兵だけが僅かに残つた。紀元前百六十五年十二月二十五日に神殿は再び献堂式を擧げて、其の禮拜は恢復せられた。それが今尙ほユダヤ人の守る『修殿祭』の起源である。紀元前百六十二年、弱年のシリヤ王安テオカス第五代エウバトルの攝政官ルシアスはエルサレム要塞救援のために大軍を率ゐて來寇したがユダはユダヤの要塞は武装を解除するけれども其の宗教は之を固執するこの條件で平和を締盟した。此の條約で宗教戦は終つて、ハシデキムの大部分は其の武器を棄てたけれどもユダはそれを以つて満足しなかつた。而して戦端を繼續して遂に政治上の自由を獲得した。彼は陰險なギリシヤ黨で、シリヤ王の傀儡たる大祭司アルキマスの位を奪つてシリヤの大將ニカノルと戦つて大いに之を破つたが、紀元前百六十一年バツキデスのために敗られ、エリアサに於て戦死を遂げた。

ユダの兄弟ヨナタンが繼いで指揮者となりアルキマス（前一六〇）の死後は凡ての國政を掌握した。剛毅にして敏腕の彼はシリヤ政府の内憂外患多端の機會を利用してユダヤ國家の利益を獲得するこゝを怠らなかつた。然るに彼はシリヤの大將トリボのため紀元前百四十四年に欺き殺されたので其の子シモンが代つて指揮者となり、エルサレムからシリヤの守備兵を蕩盡して、外國の羈絆から完全に國家を救つた。嚴肅な儀式の下に彼は國民から三つの職分を兼攝する地位に選ばれた。即ち大祭司と軍司官と總督とを兼攝し、始めて其の名を印したユダヤの貨幣が鑄造された（前一四一）。

## 獨 立 國

シリヤ王國から分離してシモンは新ユダヤ國家を創立するを得、其の勢力四隣に震ひ、ロマとの條約に由つて此を保全した。然し紀元前百三十五年彼は其の子二人と共に其の女婿にして野心家なるトレミウスの爲にエリコに近きドクに於て殺せられ、第三子ヨハネ・ヒルカナスが位を繼いだ。シリヤは屢其の領土を恢復しやうと努めたけれども、ヒルカナスは能く獨立を維持し、且つ隣國サマリヤを征服してゲリジム山上の神殿を毀ち、又イドマイヤを従へて其の住民に律法を強ひて守らしめ割禮を施さしめた。此の時に至つて此の大祭司家は信仰に於て正統派即ち愛國黨にして當時に

至つてパリサイ派と稱せられた徒黨との間に疎隔を生じ、國際主義にして世俗の野心を目標とするサドカイ派と親しむことになつた。

ヒルカナスに次いで其の子アリストブラス第一世が立つて始めて自ら國王を唱へ、海外の國情を模倣するに至つた。彼は在位僅かに一ケ年（前一〇三）であつたが、尙ほイツリヤ（福音書のガリラヤ）を併合し、其の住民にユダヤ主義を奉ぜしめた。其の弟アレキサンダー・ヨハネウス（紀元前百〇三年—七十六年）が繼いで位に即いたが、此の王は資性激烈好戰的で更に四隣を寇略してユダヤ人を以てパレスチナの全土に力を揮はしめた。ハシモン家は此の王に至つて隆盛の最高頂に達したが、此れより降り坂になつて、遂に全く衰滅するに至つた。彼の品性と行動は大祭司たるに適せず、パリサイ派の憎惡する所となり、之に酬ひるために、彼は四方に離散逃亡した同派を探し索めて殺すこと三千人に及んだ。其の死に當つて彼は大祭司職を其の子ヒルカナスに譲り、政權を其の妻アレキサンドラに托してパリサイ人ミ平和を結ぶやう遺言した事傳へられる。此の女王の下にパリサイ派は國政を掌握し、昔のダビデの王國に其の境界を權力を殆んど均くした此の國には平和と安堵が與へられたが、彼女の死（前六七）と共に其の子アリストブラスとヒルカナスの間に政權の爭奪が開始せられた。然るにアリストブラスは果敢敏活な人物であつたがヒルカナスは

優柔不斷で其の政權を有名なアンチベエターに稱するイドム人に托して顧みなかつた。時にやうやく亞細亞に其の地歩を占めて來た羅馬に兩者共に媚び、貢を贈つて援助を求めた。紀元前六十二年、兩者の側からダマスコに駐屯した羅馬の大將ボムベいに訴へ出たので、大將は即時にエレサルムに軍を進め、ヒルカナスを大祭司に任じて僅かな從臣を與へ、アリストブラス及び其の子二人を羅馬に護送せしめた。此所に於て僅かに八十年間其の獨立を維持したユダヤは再び外國の領地となるに至つた。

### 羅馬の屬國

二十年の間ヒルカナスは大祭司の位にゐたけれども、實はシリヤの羅馬知事の下にアンチベエターが政權を握つてゐた。其の間地中海岸及びペレアの數個の町村はユダヤ人の手を離れて、同盟を結び、自らデカポリス（マタイ四の二十五）を稱した。羅馬を窺に遁れ出たアリストブラスと其の子二人の子はユダヤの王位を奪取しやうと試みたけれども却てアンチベエターのために破られた。然し紀元前ユダヤの志士の手でアンチベエターは幽閉中に殺されてから政府は其の子ヘロデミアサエルに分割せられ、二人は太守の名を以て各其の領土を治めた。間もなくバルテヤ人がシリヤに

侵入し、ローマ人を驅逐して、アリストブラスの子アンテゴナスをユダヤの王位に即かしめた。ファサエルは捕へられて殺され、ヒルカナスは大祭司たり得ないやうに其の耳を剥ぎ落された。ヘロデは身を以てローマに遁れ其の歡待を受け、元老院に任命せられてユダヤ王となつた。彼は直ちにユダヤに歸還し、ローマの援護の下にエルサレムを包圍してアンテゴナスを死刑に處した(前三七)。斯くて基督の時代まで其の地位を保つた。

ヘロデは其の物質的隆盛の故を以て『大王』と稱せられたけれども性質は殘忍酷薄で其の舉動は暴虐を極めた。其の地位を維持するためにローマの權勢ある黨派に巧みに取入つて如才なく立ち廻つた。而して種々の口實を設けてハシモン家の殘留者を殺害し、其の妻マリヤムネ及び其の實子二人も同家の血を引いてゐる言つて之を斬殺することを憚らなかつた。然し彼は華やかな政治を志して秩序の恢復を謀り、國內の交通を整理し、ヘレニスト王としてギリシヤ人の國境に新たな都市を築いた。即ち昔のサマリヤの地位にセバステ(前二七)、後に國內第二の首府となつたカイザリヤ(前二二—一〇)の如きはその一例である。彼は又劇場や圓戯場をエルサレムに建設し、外國人の町々に殿堂、高廊、浴場等を建造した。特に其の最大の事業は紀元前二十年に神殿の再興に着手したことであつて、基督の時代にも尙ほ完全に竣工してゐなかつた(ヨハネ二の二十)。

〔註、今日の紀元には五年の誤算があ

るからそれで紀元前二十年となるが實際の基督降誕からは十五年前となるのである。〕

其の他彼らの傳統を重んじ、其の海外移民を保護しあらゆる手段を盡してユダヤ人臣下との和親を試みたが失敗に終つた。其の死に至るまでユダヤ人の憎惡の的となり、殊に未曾有の熱心を以て律法細目の墨守、預言書の研究に傾倒し、メツシヤ王國の希望を抱いたパリサイ派に仇敵視せられた。

紀元前第四年ヘロデの死(降誕後二年目)に次いで王國は其の三人の子に分割せられ、アケラオはユダヤ及びサマリヤの太守に、ヘロデ・アンテバスはガリラヤ及びベレアの太守に、ピリポはヨルダンの對岸の太守となつたが、紀元六年アケラオは政治に失敗したので、其の領地はローマの總督が直接支配することとなつた。『總督』と譯したのはプロキュレエタアで、元來は皇帝のために税金を徵收する官吏と言ふ意味から斯く稱したもので『徵稅長官』である。

ユダヤ及びサマリヤの總督(六一—四一)はコボニウス、エム・アムビヅキウス、ルフス、ヴレリウス・グラチウス(一五—二六)又紀元二十六年—三十六年のポンテオ・ピラト、マルセルウス(三六、三七)及びマルルウ(三七—四一)であつた。故更にか或は無意識にか彼らはユダヤ人の感情を害しない人物はなかつた。又其の多くが試みた略奪を慎んだにしても、課賦、租稅の徵收は彼らの責任であつて、此れがために皆國民の怨嗟の的となつた。ポンテオ・ピラトは不朽の汚名を傳ふ

る基督の裁判を行つた人物であるが、此れに由つて絶えず世の憤慨を買つてゐる。當時總督の官邸はカイザリヤにあつたのであるが、彼が大祭のために臨時エルサレムに出張してゐた所に基督に對する暴動が起つた。斯くて總督の制度は國內に不満の氣を漲らして遂に謀叛を企て、メツシヤの王國を兵力を以て建設せんとする熱心黨の團結を促すに至つた。

其の後ロマ統治の組織が少しく變更せられ、紀元三十四年、地方の太守ピリボが死んだので其の領地はヘロデ大王の孫ヘロデ・アグリッパへ與へられ、王と稱することを許された。同四十年、バプテスマのヨハネを殺したヘロデ・アンテパスが失脚してゴオルに放逐されたのでガリラヤ及びペレアも其の領地となり、更に一ケ年の後ユダヤ及びサマリヤの總督制も撤回されて其の領地も彼に附與せられた。アグリッパはロマに背かずしてパリサイ派に親む政策を採つた。遂に彼はパリサイの儀典を自ら守り、ユダヤ人の偏見や傳統を尊び、初代の基督者に迫害を加へた（使徒行傳十二の一—十九）。其の位に在るこゝ三二年、彼は不意にカイザリヤで死んだが、其の子アグリッパ二世が幼弱で政を見ることが出来ないので國はシリヤの政廳の下に管轄せられる總督の手に治められることになつた。

パレスチナ全國の總督はカスピウス・ファデウス（紀元四四—四六）、テベリウス・アレキサンダ

ア（四六—四八）、ヴェンチデウス・カナヌス（四八—五二）、フェリクス（五二—六十）、ボルシウス・フェスチウス（六一—六二）、アルビヌス（六二—六四）、ゲシウス・フロルス（六四—六六）等である。何れの總督の時代も其の暴戻、殘忍な點ミユダヤ人が常に憎惡復讐の念に燃えてゐたことは前期の總督制當時と異なる所はなかつた。フェリクスは其の最も甚だしいものでユダヤ人の怨は骨髓に徹し、熱心黨の勢力は其の數に於て其の團結力に於て愈加はつて來た。然しフロルスの時代には其の危態を辛ふじて支へるこゝが出来た。

第一回の暴動はカイザリヤで起つた。此の異邦人の都市には大きなユダヤ人殖民地があつたが、ユダヤ人は市民權を剝奪せられ、街路で侮辱せられて放逐せられた。フロルスは進んで其の機を外さずエルサレムに亂入して神殿の財寶を略奪し、其の市民を夥しく殺戮した。其の怨恨は國內隅々に張り、至る所、ユダヤ人と異邦人との間に激烈な争鬭が行はれるこゝになつた。總督は直ちにシリヤの知事に援兵を索めたので、知事ゲスチウス・ガルリウスは兵二万三千を率ゐてガリラヤを畏服せしめて後エルサレムに進んだ。然るにユダヤ人のためにベテ・ホロンに於て破られ、死傷夥しく敗走した。ロマは更に戰場に幾次びか功を建てた老將ヴェ斯巴シアンに大軍を授けてユダヤに向はしめた。彼は紀元六十七年各地の都市を征服した。歴史家ヨセフスも亦俘虜として捕へられた。

エルサレムは物資の缺乏と熱狂者の活動で、其の防兵の数は日に減じて自滅を招いてゐたので、當時は暫く之を圍んだまゝ、其の爲す所に任せた。二萬六千のイドム人に援助を受けて、熱心黨は辛ふじて聖都の秩序と防衛とを維持したが、不和鬭争を生じ、疫病、飢餓のために困窮慘憺たる有様になつた。同六十九年の夏ヴェスパシアンはロマ皇帝の召還を受けて、其の子チチウスが司令官となつた。エルサレムはチチウスの包圍の下に四ヶ月を支へたが其の苦惱窮乏は言語に絶して遂に同年八月、憎悪憤怒に燃える兩軍の残忍な戦鬪の下に陥落した。チチウスは神殿及び市街に手を觸れしめない計畫であつたが、其の兵士が令に背いて火を放つたために神殿も市街も一物も残さず焼土に化した。住民は大部分は斬殺せられ、生存者は、其のロマ凱旋の飾として用ひられる者の外は奴隷に賣られた。斯くて基督の警告は四十年を経て此所に實現した（ルカ十九の四十二―四十五）。

死海の東のマケイラス、西のヘロディオオン及びマツサダの三城塞は暫く抵抗を試みたけれども遂に破れた。マツサダは天嶮の頂に建てられ、能く防ぎ紀元七十三年までも之を支へた。而して其の陥落して包圍軍の手に歸したとき守兵は互に刺し違へて死んでゐたと言ふ。

ユダヤはロマの知事の下に殖民地となつた。其の残留住民は諸國の漂泊者たる自國民ミ何の違もない取扱を受けた。政治上の權利もなく、サンヒドリムを有せず、神殿もなければ、祭司もなく

外國にゐる外國人の身の上異なる所はなかつた。ハドリヤ帝の時代一次び叛亂を試み、シモン・バルコケバの指揮の下に三ヶ年（一三二―一三五）ロマの追誅軍を支へたけれども遂に叛軍は全滅するまでに敗られた。此所に於てエルサレムは名をエリヤ・カピトリナと改稱し、異邦人の都市にせられてユダヤ人の定住を禁ぜられた。此れを以てユダヤ人の歴史は中斷して、祖國ミ國民との關係は全く破却し盡された。

新約聖書註解

『ヘブル書』  
附ユダヤの祭日及び儀典  
録ユダヤの歴史

定價壹圓八拾錢  
送料十八錢

不許  
複製

昭和五年六月二十日印刷  
昭和五年五月發行

著者 日高善一

發行者 西阪保治

大阪天王寺區田院町二番八地

印刷者 松井英弼

大阪西區大仁二丁目番地

印刷所 凸版印刷株式會社  
大阪分工場

大阪西區大仁二丁目番地

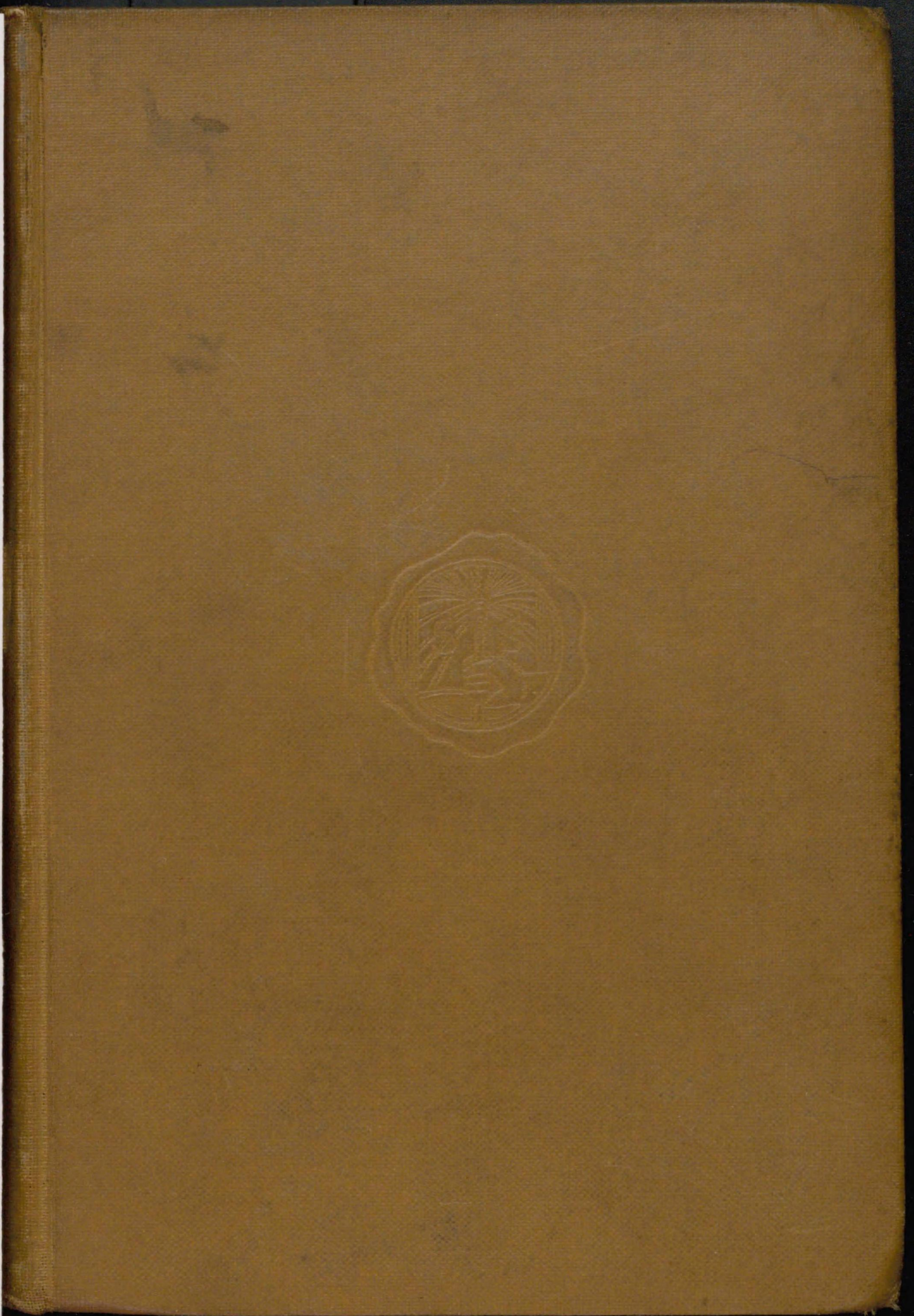
發行所

大阪天王寺區  
田院町二番地

日曜世界社

振替大阪一六七四番



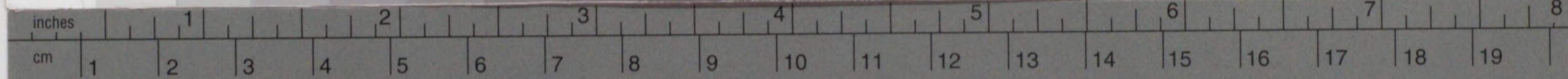


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

